
ドラギニヤッツォ

永良隆樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラギニヤッツォ

【Nコード】

N0455G

【作者名】

永良隆樹

【あらすじ】

妖魔使い、経遠ノ抜き身の妖刀片手に暗がり立つその姿は、着古したオリーブ色のモッズコートに、淡い金色の髪。ノ昭和の日本。この国に潜んでいた妖魔使いらの戦いが起こる。経遠、種遠、武遠、ハナ、カヤ、五人の妖魔使いの、剣戟ハードボイルド小説。

佐畝君メットを拝借す／埠頭の剣戟

1980年代後半。二・ホン（以降日本と表記）。七姫市、サクラ町――。

雑然と散らかった一部屋だけのアパートで、古風な名前の持ち主、遠野佐畝君は鉛のような頭を持ち上げ目を覚ました。すでに夕刻。時計を見ると四時少し前。つけっぱなしのテレビでは、再放送の子供番組。

――ううん。なんてこった。

とは言え驚いてみせることではない。いつもの日常。体中の血液の半分くらいが、アルコールに浸食された感じ。ヘドロのような感覚の体を、底の抜けたパイプベッドから起こした。

ブリーチしすぎの淡い金色の髪をわしゃわしゃとかき、寝起きの煙草をふかす。正氣に戻れば澄んでいる、あどけなさの残る眸子がドロンとして定まらない。

泥酔して帰ってきて、モッズコートを着たまま眠ってしまった。た。ふらふらと起き上がり、コートを脱ぐ。冷蔵庫から取り出したアルカリ飲料を咽喉に流し込み、血中アルコールを中和し、その濃度をさげるべく努めた。

この街へやってきてはや二ヶ月。すっかりこんな暮らしぶりが板についた。

――シャワーを浴びたいところだけど、空いてねえんだろうなあ。学生向けのそのアパートは共同風呂。他の住民はほぼ大学生。隣に住む、幼馴染のミケ以外。

まあ、いつかあ。と、佐畝君はシャワーをあきらめた。もしかしたら今日女の子ナンパできるかもだし、そしたらホテルで風呂に入るう――。そんなふとどきな一日の設計を抱きつつ、身支度をはじめた。

が、トレーナーを着替えただけ。で、

これでよし、とばかり、満足して歯を磨き始めた。そして思い出した。

——そうだった。メット。今日からメットがいるんだよ。

今日から、原付でもメット着用が義務付けられるというのに、メットを買うお金を持っていないことに思い及んだ。

千円、二千元なら、ある。しかし、一万円はない（一万円もない懐具合で、女の子とホテルに行こうという算段はいかななものか。しかし、彼にとって不思議はない。バイトしたあとなら日銭が入るし、足りなければ女の子が払ってくれるだろうという目論見）。

しょうがない。ミケに借りよう。佐畝君は思った。一万円を、ミケも持っていないことを知っている。が、メットなら何個か持っている。50ccの彼のベスパとは違い、ミケのベスパは中型で、女の子を後ろに乗せるために、予備のメットを用意していることを知っていた。

持つべきものはメカニックの友達。というより郎党。佐畝君はモツズコートをはおり、散らかった自分の部屋を出た。

隣の部屋のドアをどンドンどんと叩いた。が、返事はない。そこでドアを開き勝手になかに入った。

ミケは寝ていた。

その頭をばかりと殴って、叩き起こした。ううう、とうなっているミケの口に歯ブラシを突っ込んだ。

「メットを拝借したい。起きやがれ」するとミケは、ひでえっすよお、とうなりながらも、部屋の隅を指差した。見れば三個ほどのメットが転がっている。

「どれを借りてもいいのか？」と聞くと、ミケはうめきながら、ステッカーの貼ってない奴、と言った。

ステッカーの貼ってあるのはひとつだけ。黒いジェットヘルを選ぶと、勝手に箆笥から着替えを引っ張り出し、ミケに向かって投げた。

「召し替えよ」
命令した。

あやめもわからぬ闇夜のなかを、ひた走る一人の若者。手には抜き身の日本刀を持ち、左手にはその鞘。闇を蹴破る勢いで足を飛ばす。暗闇のなかに白刃ちらちらと光る。

若者は、行方をくらました仲間を捜してこの町へ来た。が、同時に、放たれていた刺客。姿を見せぬがこの闇のなかを、寸部離れず追ってきている。押し殺したふたつの足音を、その耳がとらえている。

闇の底に静まる倉庫の影を伝い走る。釣り客の姿さえない埠頭。遠く対岸に幻想的な工場地帯が煌々とあかりを灯し、黒くゆつたりとした波が、その光を映し揺らしている。

ここまで来れば充分である、とばかり若者は足を止めた。

「名乗れ」闇に向かって吐きすてた。

闇は静まり返っている。ともしび一つない巨大な船影を背に、刀をかまえ待ち受けた。沖を走る船により、ひたひたと寄せる波の音。背後の船影がわずかだけ揺らぐ。

一足飛びに闇のなかから躍りかかったふたつの人影、都合四本のナイフが彼を襲った。爛々たる双眸きらめかせ、身を翻すすべてかわすと、逆に手の太刀を繰り出した。が、切り裂いたのは闇だった。

若者はふところから取り出した小さな玉を放り投げると、番号を叫んだ。

「八拾壱番！！」

その瞬間、細い紐で幾重にも封印された玉を裂き、現れたのは炎噴きあげる溶岩の龍。灼熱の牙で追っ手の一人を炭に変えると、ふたたび小さな玉となって若者の手に戻った。

これには、たまらず残る追っ手が悲鳴をあげた。

「貴様！！ まさか、種遠かつ！！」

が、言い終わる前に白刃くらい地に倒れた。

敵が息絶えるのを見届けて、若者は刃を鞘へおさめた。

闇のなかから駆けてきたのは、彼の仲間。がっしりとした体躯の大男。

「武、か」

「卻^{しりぞ}けたか？」

「ああ」と声をかわすと、転がるふたつの死体を見おろした。

「やはり、奴らか」

「八拾壱番を知っていた。かつてのはらから（同胞）堕ちた龍、である」

「奴らがなんと名乗っているのか、組織名もいまだわからんとは……」とうなる大男。年のころは同じくらい。一人がオリーブ色のフライトジャケット。もう一人がボア付きの皮のジャンパー。が、その服装にそぐわない、いかめしい話し言葉。

「技玉はあらためたか？」ふと、気づいたように言う大男の言葉に、

「いや、まだだ。感じなかったが」と言い、若者はしゃがみこみ敵のふところを探った。

「持っていない」

「では、戦闘員ではなかったか……」

追っ手は充分強かった。ここで言われる戦闘員とは、さっきのよな玉を使えるか否か、ということであるようだ。

「まさか族^{うかみ}首^{あひびと}家の者ではあるまい？」その言葉に、

「いやいや、ならばもつと強かったはず」と答える若者。

一人が、ふつ、と堪えきれぬように笑い、もう一人がそれを訝し

がった。問われると、言った。

「いや。この名を口にするといつも思う。なんと大仰おおおごうな名を名乗ったものだと。誰か止めなかったのか？」

「江戸の世のことだ。今となつてはわからん」もう一人も笑った。

それから、連れ立ってその場を離れ、闇の中を歩きながら話した。
「それはそうと、馬鹿野郎の消息は？」

それは、捜している仲間のこと。放縦ほうじゆうな生活を夢見て、都会へ姿をくりました。

「まったく。何も、だ」

「そつちもか」と肩を落としてみせた。

闇のなかに転がっていたギターケースを拾いあげた。それは、さつきその若者が自分で投げ捨てたもの。手の日本刀をそのギターケースへおさめた。そして、にやりと笑い言った。

「しかし、カヤが手がかりをつかんだ」

「本当か？」

「ああ。奴の、ではないが。三毛門は御食ミケと名乗っているらしい」

「何？　そこまでわかれば、カヤなら時間の問題ではないか」と、驚く大男の肩を、若者は笑いながらどついた。

カヤ、現われ、逃げる

ミケと連れ立って、佐畝君は繁華街へやって来た。いつもの行動。古びたゲームセンターの前にベスパを路上駐車して、慣れないメットを外すと、手櫛でぺしゃっとなった髪を整えた。

ここは若い連中がたむろして、深夜までにぎわう。すでに顔見知りの人間も多い。多くはガラの悪い、いわゆるロツカー風の若者。ここで夜が更けるまで時間をつぶし、女の子をナンパするか、できなければバイトへ行つて、日銭を稼ぐ。

暇つぶしに知り合いの若者たちと話をする。その時は、昔言葉は使わない。普通に話す。昔言葉を使うのは、彼にとってシャレみたいなもの。時折出るそれを、相手もシャレと思つておもしろがる。

顔見知りの女の子が現れて、彼は軽く手をふった。由季恵ちゃんというその子は、お金持ちのお嬢さんらしいが、パンクロックが大好きで、よくライブハウス通いをしている。それでここにもよく顔を出す。実は先日ホテルに行った。が、由季恵ちゃんは、彼に気づくと怒った顔をして立ち去った。

あれれ、と思いつつも、理由はわからない。夜も更けたのでバイトへ行くことにした。

「今日はナンパは無理だな」とミケに別れを告げ、向かった先は、ホモバーと呼ばれる飲み屋がいつぱい入った雑居ビル。

で、入った店も、いわゆるホモバーであり、そこは勿論ホモやゲイボーイがたくさん集まる店である。

ゲイバー遊びをしているときに、仲良くなったゲイボーイに連れられて、その職を得た。

そこで働いているのは彼であり、ミケはのほほんと遊んでいる。ミケはいわゆる郎党であり、飯くらいは食わさなければならぬ。その責任は当然のこととして、理解している。

店に入ると、カウンターはゲイボーイで埋めつくされていた。嬌

声に迎えられカウンターのなかに入った。同僚の若い男の子はみな男色ではない。客とマスターのみ男色である。マスターは彼の知るところの妖獣、のような人相。一応、人間。

同僚の男の子たちとハイタッチをして、客のゲイボーイと握手して回る。酒を注ぎ、酒をふるまわれる。たくさん。この仕事は嫌いではない。

——あの野郎。

由季恵ちゃんはむかっている。

その、佐畝というえらく古風な名前をしたモッズの若者のことは、彼がこのあたりに顔を出しはじめたときから知っていた。目立っていた。実は、ちょっと気になっていた。その辺で群れている、若い男の子にはないものを感じて。

が、先日のこと。誘われてホテルに入ったが、何もなかった。

風呂に入りたかっただけのようだ。しかも、半分払わされた。

——そんな許せない男って、いるっ!?

——わたしがどれだけ勇気をふりしぼって着いて行っと思ったてるのよっ!?

思い出すたび腹立たしい。

午前五時。もう、夜が明けかかっている。バイト明けの佐畝君が、

雑居ビルの出口に姿を現した。かなり酔っている。

エントランスに座り込んで待っていたミケが、駆け寄り肩を支える。

「大丈夫ですか？ 今日にはまたこんなに酔って。バイク乗れますか？？」

「うん。大丈夫である……」

その時、背後から肩をつかまれた。

「兄上。やっと見つけましたよ」

聞き覚えのある声に、ぎよつとしてふり返れば、一瞬で酔いも冷める思い。

「か、カヤー!!」

カヤと呼ばれた少女は、長い髪を後ろで結わえ、幼い顔立ちに似合わない、気の強そうな眸。腰に手を当て、どこことなく尊大な笑みを浮かべ言った。

「もう、逃げられません。覚悟なさいませ」

ジーンズとダウンジャケットに身を包んでいるが、その口調は昔言葉。しかも佐畝君のそれがシャレであるのに対し、この少女のそれは、シャレではない。そういうしゃべり方なのだ。

「な、なぜ、ここに!？」

「三毛門のあとを尾けました」

「み、ミケ……。なぜ、気づかなかった？」睨みつけると、ミケは青ざめている。

「種、武、引き連れて、必死で捜しておりましたところ」

その言葉に、肝を潰した。

「げっ!？ 種チンに武チンも来てるのかっ!？」

「今、ここにはおりませぬ。が、」と言いかけた少女の言葉をみなまで聞かず、

「ならば、逃げるまで!」と駆けだそうとした。が、

「お待ちなさい!! 三毛門!!」と彼女はミケを叱責した。ミケはあがらうことができずに立ち止まった。

「此度のこと、三毛門のそそのかした事とは思っておりませんが、首さまにおかれましては、いたくご立腹^{おびと}」

聞いているうちにミケの顔がますます青ざめた。

「こいつ!!」そのミケの、襟首つかんで駆けだした。

「兄上!! 往生際が悪すぎます!!」キツ、と目を吊りあげて追ってくる少女。佐畝君の服のすそをつかむと、ポケットに件の玉^{くだん}をねじ込んだ。

「せめて七拾四番と八拾九番をお持ちなさい」

「うわあ、いるかあ。こんなもの。持ってたら敵に狙われるじゃないかあ」

叫びながら、こけつまろびつ、ミケと二人で逃げだした。

ほうほうの体でベスパにまたがると、震える指でキーをまわし、夢中でアクセルをふかした。

怒り、叫ぶ、少女をあとに残し、信号無視して走り去った。魂消た、魂消た、言いながら。

種、武、カヤ、ハナ、そして沙穂

カヤが現れて四日後。

ずっとアパートに籠城していたが、とうとうミケが泣き言を言った。

「もう、カップラーメンは飽きました」

佐畝君は、カップラーメンすすりながら叱った。

「馬鹿者。今、のこのこ出て行ったら捕まる。辛抱しろ」

「でも……」というミケをさとした。

「もう、奴らには十分な時間が与えられた。おそらく、種チン、武チンだけでなく、ハナも姿を現していよう。いいか。ハナが来れば終わりだ。それくらい、判れ」

「うう……」涙ぐみながらミケはカップラーメンをすすった。

とは言え。ほんとに金が底をついてしまった。さらに二日後のことである。

このままでは死んでしまう……。と感じた。籠城とはこんなに辛いものだったのか、とも。

ミケは郎党である。辛抱しろ、と言ったら、辛抱したまま死んでしまっただろう。

バイトに行かなければ、と思った。行けば、六千円くらいにはなる。牛丼が食える。さらに、酒をふるまわれる。酒も、飲みたい……。

ついに彼は決心した。

ポケットから、件の玉、七拾四番と、八拾九番を取り出し、押入れに入れた。

種チンは、自分の近くにこの玉があると感知できる。仲間ばかりでなく、敵にもそういう人間はある。持っているだけで見つかってしまう、厄介な代物だ。

ただし、こつちだつて感知できる。だから、種チン、武チンがそばに来ればわかるはずだ。

さらに、闇に潜むのなら、得意技である。まさかバイト先までは知られてないだろう。たどり着きさえすれば、しめたものである。

彼はミケをアパートに残し、一人でバイトに向かった。

いつものゲームセンター前には停めず、裏道を回りこんで、雑居ビルまでたどり着いた。エンジンを止めず、しばらくまたがったまま、様子をうかがう。気配を感じたら、いつでも逃げられるように。

三分ほど、そうして待ち受けたが、杞憂きゆうのようだった。

安心してバイクを降りると、由季恵ちゃんが現れた。彼に気づくと、物問いたげに近づき、こう言った。

「ねえ、ねえ。最近、佐畝君のこと、聞いてまわってる人がいるよ」

「げっ!! まじでっ!!?」間違はなく奴らだ。

「そう。だって、モツズの恰好かつこうの変なしゃべり方する男の子、って言ったら、そうでしょう? でね。今、なんと名乗っているのだ?

って聞かれたんだけど、佐畝君って、偽名だったの?」

それは、あまり触れられない事柄だが、もはや誤魔化しようがなく、しぶしぶうなずいた。

由季恵ちゃんは柳眉を逆立てて怒ってしまった。

「あんたって、ほんつと最低な奴!!」と背を向けた。

そのあとを、必死で追いかけた。

「ちよつと、待つて。ちよつと、待つて。それで、名前教えたの?」

けれど由季恵ちゃんは、中指を突き立てて見せると、去ってしまった。

——まずい。もし、名前を知られたら、立つ瀬がない。知られることがない、と思い、安易にこの名にしたが、知られてしまつては、これほど恥ずかしいことはない。

——ああ。なぜ、あの時。戸籍を偽造する際。この名しか思い浮かばなかったのだろう……。思い悩んだが、思い悩むとしても、今、この場で立ち止まり、思い悩むべきではなかった。すぐに思い知った。

気づくと、目の前にカヤがいた。にたり、と笑った。

慌てて背を向けると、でかい図体の武、ギターケースを背負った種、がいた。

——なっ、なぜ、感知しなかったっ——。

「き、貴様ら、技玉はっ!?」慌てふためいて問うと、種も、武も、肩をすくめて見せた。

「ま、丸腰で出歩くとは、卑怯だっ!!」泡を飛ばしながら言つと、
「お前もだ。経遠^{つねとつ}」手厳しく種チンが言った。

「で、貴様、戸籍名はなんと名乗ったのだ?」

「うぐっ……」佐畝君が答えに詰まると、

「俺たちは戸籍名については無頓着だ。どうせ、貴様も姓に『遠^{かはね}』の字を入れたか。で、名はなんとしたのだ?」

佐畝君が黙っていると、

「答えたくないなら、まあいい。すぐにハナが沙穂^{さほ}を連れてくる」と種は死刑宣告のように告げた。

なんだとっ!! ハナが現れるだけで一巻の終わりなのに、

「沙穂まで来るのかっ!!」驚倒しそうになった。

「そうだ。お前の許婚だから当然だ」

——ああ。なぜ、安易にこの名しか浮かばなかったのか……。

——そりゃ、多少はロマンティックな想いもあった。もう二度と逢わぬものと思い定め、せめて名に残そうと。

——が、こうしてふたたび逢いまみえてしまつては、これほど恥ずかしいことはない。

——いや、いや。あきらめてはいけない。要は知られなけりゃいい

んだ。知られなきや。

青ざめながら覚悟を決めていると、突然、暗闇のなかからラリア
ットが飛んできた。

「経遠おっ!!」

そう言つて、ぐりぐりと頭を羽交い絞めにするのはハナである。

種の女房であると言うのに、乳房がぐいぐいと頭にあたっている。

「待て、待て、少しは恥じらいというものを持って」焦つて言つと、

「それは、こっちの台詞だあ!! 経遠!! 貴様、おのれに何と
名づけたあ!!」とハナは嬉しそうに叫んだ。

頭を解放され、呆然としてハナの台詞を反芻した。ま、まさか…

…??

背後で、彼のコートのすそをつかむ小さな手を感じた。恐る恐る
ふりかえると、髪の高い可憐な少女の姿。薔薇色に頬を染め、うつ
むきながら、恥ずかしそうに言つた。

「沙穂はうれしゅうございます……」

——まさか……。もう、知られていると言つのか……。まじ……で
??

愕然とする彼の視界に、鼻血を流しているミケの姿が映つた。こ
ちらに向かつて、必死で両手を合わせている……。

——なぜ、種チン、武チンでさえわからなかったアパートを、ハナ
は捜し出せるのだ。

「甘いわあ。まあ、しかし、今回は貴様の乙女チックな心掛けに免
じて許してやる。皆、聞け。なんと、この男が、遠く離れた許婚を
想い、自身になずけたその名は」

「違う!! 違う!! 言うなあ!!」彼は必死で叫んだ。

「さほ、である」

種、武、は「おう」と目を丸くして、カヤは、眸を輝かせた。

「おっ、おっ、おっ、思いつかなかっただけであるっ!!」佐畝君
は顔を真っ赤にして、泡を飛ばして叫んだ。

きゅっ、とコートを引っぱられた。ふりかえると、

「うれしゅうございます……」最前と同じ言葉を繰り返す沙穂。大きな瞳を潤ませている。

彼は、この娘の、こういうところが苦手なのだった。どう扱っていいか、わからない。

「兄上」カヤが、感激した口調で言った。

「あれほど、沙穂を避けておいででしたのに、心の奥底ではそんなにも想うておられたのですね」

違うつ、勘違いだつ、と言う台詞をのみこんだ。もし言ったら、沙穂は泣き出してしまふ。

彼は、この娘の、そういうところが苦手でしかたなかった。

「では、さほ、よ」種遠が言つと、「はい」と沙穂がふりむいた。

「違ふ。お前の想い人のほうの、さほ、である」と種遠はにやにやしながら言つた。

佐畝君は憤慨して、

「さ、沙穂が現れた以上、経遠と呼べ」と言つた。が、

「種は、貴様の思いの深さに打たれたのだ」と、武遠もにやにやしながら言つた。

「貴様らあ」言葉を継ぐ佐畝君に、その後も、さほ、さほ、と繰り返して、さんざんからかい、さんざん弄り満足すると、最後に頭首の言葉を伝えた。

「此度の出奔しゅっほん、まことにふとどき千万、即刻、祖元おやもとへ帰れ、とのこと」

「いやだつ！！」これ以上ないほどきつぱりと、佐畝君は吐き捨てた。

「兄上」カヤが言つた。

「いい加減、覚悟なさいませ。みつとものうございます」

「こらこら」ハナが手を伸ばし、彼の髪の毛をぐわしゃぐわしゃと掻き回した。

「抱いてみよ」と恐ろしいことを言つた。

「沙穂を抱け。気が変わる」

「貴様、それでも女かつ」抗議した。真っ赤になってうつむいた、沙穂が気になりながらも。

「わたしは女だ。男をよく知っておる」ハナは平然と答えた。

「俺が知ってる『女』には、『恥じらい』と言うものがある」と言う佐畝君をはなで晒い、

「沙穂ばかり見ておる証」と断じた。

沙穂が、さらに真っ赤になってうつむいた。それが気になりながらも、

「ほう。沙穂ばかり俺が見ているだど？」窮余の一計を案じた。攻撃。攻撃こそ突破口。攻撃してその隙にこの場を逃れる。

「ミケ。教えてやれ。先日、俺が由季恵ちゃんという女の子とどこへ行ったか」

全員の視線が、ばっ、とミケに集中した。

その隙に身を翻した。「やつ！」と気づいて伸びてきたハナの手を逃れた。種遠の手をはじき返し、カヤの手の下をかくぐつた。ベスパ。そのエンジンはかかったまま。飛び乗ると、勢いもそのままに走り出し、追ってくる仲間をふりきった。

許婚、とはふざけてやがる

アパートに飛び込むと、猛烈な勢いで荷造りをはじめた。衣服、いくつかの捨てたくない物。技玉、七拾四番と八拾九番――。

これを持っていれば、いつか見つかる。が、こんな危険なものを置いて行くわけにはいかない。勿論、こんなもの手に入れたって、普通の人間には使えない。危険なのは、これが敵の手に渡ったとき――。

佐畝君は、それをモッズコートのポケットに捻じ入れた。その時、遠慮がちなノックの音が。

――早いっ。もう、来たかつ。

肝を潰して身をすくめた。が、扉は一度鳴ったきり黙したまま。不信に思い扉を開くと、そこには、可憐にうつむく沙穂一人きり。コートのボタンを襟まで止めて、そこに寒そうに立っている。

「げっ!? 沙穂!? いや、沙穂だけか??」驚き、油断なく、暗い廊下の隅にまで目を光らせ見やった。

「はい。皆さん、わたしに、説得してみせると……」か細い声で沙穂は言った。

奴らの邪な意図に気づいた。普通それを『説得』とは言わない。言うならば『陥落』して来い、だ。

とは言え、追い返すこともできず、部屋に招じ入れると、中の様子を一瞥見て、

「なんというお暮らし向き……」と手を口に当て、大きな瞳を潤ませた。

さらに、床に転がるエッチな本を見つけや、拾いあげ、身を凝らせて、

「このようなものが**いじょう**必要なら、沙穂がおりますのに……」と悲しげに言った。

その台詞の意味するところに、思わず悩殺されそうになったが、

思いとどまった。

そもそも、それを懼れているから、避けてるのだ。彼にしても、沙穂が嫌いなわけではない。むしろ逆である。

そりゃあ、はじめは逃げ回った。けれど、今は違う。多少、いや、かなりうつとうしいところもある娘だが、そんなところも今では可愛く思えてしまう。

だが、奸計である、と思うのだ。

明治以降、彼のうから（族）は何の政にも加担していない。加担していない以上、その扶持を養ってくれるのは、古くから続く沙穂の一族だけである。二人が結婚することは、そのますますの結託をもたらす。まさに、親同士の悪巧みである。

彼は十八、沙穂はまだ十六。むぎむぎとそんな奸計に乗ってたまるか、と思う。

——それよりも、なんだか、まじまじと見てないか？ 表紙を。

佐畝君は、沙穂の手からエッチな本を取り上げた。

「あう」沙穂は名残惜しそうな顔をして、手を泳がせたが、叶わず、あきらめた。そしてあらためて向き直り、もじもじしながら言った。「沙穂はいまだ、片恋のままだであるかたこひと知りました。三毛門さんに聞きました。ずいぶんと、お綺麗な方だそうで……、由季恵さん。その方と、その、ほ、ホテルへ、行きましたとか……」

久しぶりに耳にする物言いに、意地悪な考えが浮かんだ。少し苛めてやるうと思った。

「いいことを、教えてやる」そう言うと、笑みを浮かべて続けた。

「一緒に、ホテルへ行ったのはその娘だけじゃない」

それを聞くと、沙穂はまたまた瞳を潤ませた。叶わぬ想いを抱えきれず、うつむき、瞳を伏せた。まぶたに押し出されたものが、自然、涙となつてぽと落ちた。

さすがにバツが悪い思いをして、慌てて付け加えた。

「が、風呂に入って、俺はソファで寝ただけだ……」

「経遠さま、まことに……？」まっすぐ彼を見て聞いてくる。

「なにもない。いつもそうしていた」別に本当のことであるから、悪びれずに答えた。沙穂は安堵したようだった。

「沙穂はてつきり、戯れ心にあちこちと花咲く小道でうつつを抜かしておいになる、そんなお人に、経遠さまがなってしまわれたかと……」

「ハムレット、第一幕、第三場のオフィーリアの台詞だ」鋭くつつこむと、

「はて……」沙穂はとぼけて見せた。

「それはそうと、今ひとつお聞きしたいことが。さほ、とはどのような漢字をあてられたのですか？」

「畝をささえるだ」と答えると、またまた、

「はて……」とつぶやいて、今度は不思議そうな顔をした。

「放縦な生活を夢見て都会へまいられたにしては、そぐわぬような……」合点がいかぬ表情の沙穂に、

「俺は、地味にこつこつ暮らしたいだけだ」と吐きすてた。

「働いている」と少し自慢した。

「男色家が集まる酒場の給仕だ。良い職場だ」沙穂にわかるように言葉を選んで説明した。

が、説明すると、ふたたび、大きな瞳が涙で潤んだ。

「経遠さま、沙穂を忘れ、その道へ……。されど、沙穂も武家の娘。武將のたしなみと心得ており——」

相手の言葉を焦ってさえぎった。

「違う！！ 勘違いするな！！ 俺は普通だ。一緒に働いている若者たちも普通だ。それをノンケというらしいが」

「ノン、家……？」

「そうだ。俺はノン家だ。男色家ではない」もっとも、ノンケのケの字は、毛であると思われる。毛色がない、という意味で。

「しかも、だ。おもしろいことを教えてやる。男同士でのそれを、なんと、チャンバラ、と言うらしい」

「チャンバラ……」首をかしげる沙穂に、

「深く考えるな」と言った。

「ともかく、今、この家には食べるものがなにひとつない。コーヒの粉さえ舐めつくした。ふるまうものが何もない」

「知っております。三毛門さんから聞きました。なんでも、この一週間カップラーメンばかりだったとか。それさえも、昨日底をつき……」

「そう。だから、悪いことは言わない。ハナらのところへ戻れ」

「ハナさんから命令されております。戻ってくるな、と」

「違う。よく考える。ハナと沙穂の間に主従関係はない。だろう？
しかも、どちらかと言えば沙穂が主人だ。聞く耳持つな。第一、誰も彼も、簡単にそれをそそのかすが、そもそも、お前の爺はなんと言っている」

沙穂は幼い頃両親と死別している。彼女を養っているのは、グループ企業を束ね会長職についている古老である。結婚を望んでいることは勿論知っている。だが、なし崩しのそれを許すとは思えない。廃れようが腐ろうが、そこは武家の家柄、モラリストのはずである。

沙穂は祖父の口調を真似て告げた。

「経遠においては、あのような気性ゆえ、時に手段を選ぶな、と……」

「ぶっ！！」噴出してしまった。

どうして、どいつもこいつもこうなのだ？ と、怫然となった。どうして、どいつもこいつも、この不思議少女を遣って、俺を惑わす！？

沙穂はにっこり笑って言った。

「沙穂の意志で帰りませぬ。それに、このまま帰っては、経遠さまが飢え死にされてしまいます。種遠さまより金子も預かってございます。これをお渡ししろと」

「なに！？」それを早く言え、ってんだ。

「三千円、です」

「たった、か!？」驚いた。

「たくさん欲しければ、沙穂について帰れ、と」

「うぬ……」あの野郎ども、とうなった。

が、しかし。それだけあれば、沙穂と二人で牛丼が食べられる。

腹が減りすぎて妙案も浮かばない。沙穂を誘い、牛丼を食べに行くことにした。

ハヤヒ（巴耶毘）現る／ふたり殺した

しかし、牛問屋の入り口で沙穂は立ちどまり、怯えた様子で、
「殿方ばかり……」と言った。

考えてみればこんな野郎の園のような場所へ、この不思議ちゃんを連れて行けば注目度満点、なにが露呈しないとも限らない。避けたほうが良いことは彼でもわかった。

「だったら、俺がいつも行く店へ」と言っつて、激辛ラーメン屋へ連れて行った。

そこは人気店で、家族連れが多く、いつも混雑している。目立ちたくない彼等には好都合な店だ。

「なんと、面妖な……」運ばれてきた激辛ラーメンを目にして、沙穂はつぶやいた。

そのスープは澄んでいるが、真っ赤、で、大量の鷹の爪がぷかぷか浮いている。慣れた者でも不用意に口をつければむせ返り、はじめは味などまったくわからぬ代物。食べはじめて五秒で玉の汗が噴出す鬼のようなラーメン。

猫舌、お子様舌である沙穂は、一口も口をつけることができず弱り果てている。

彼としては、驚く顔が見たかっただけで、彼女が食べられるとは思っていない。

彼女に普通の五目ラーメンを注文してやると、彼女の分の激辛ラーメンは自分が食べた。

激辛ラーメン二杯食べて店をあとにしたが、空腹が癒されるととたんに眠くなってしまった。頭が鈍って妙案が浮かぶどころではなかった。

これからどうするか、働かない頭に鞭打って、思い悩みながら小さな公園を横切っていたときだった。

近づいてくる妖魔の気配を感じた。敵の技玉。

それは、今までにも何度も感じていた。が、今は近づいてきている。ポケットの中に入ったままの七拾四番と八拾九番、その気配を感じて追ってきたに違いなかった。

沙穂をふり返った。

「敵が近づいている。俺から離れろ」

が、沙穂は恬として答えた。

「嫌です……」

予想していた答えだったが、ほんの少しは期待していた。逃げてくれることを。

彼はすぐに考えを変えた。沙穂を説得する時間はもうない。内気そうに見えて沙穂は強情である。子供の頃から、彼一人を想い、幾年片恋のままで、まったく考えを変えない人間だ。その沙穂が嫌だと言ったら、あきらめるしかない。彼は思いなおした。

——なら、俺が守るしかない。

が、ナイフすら持たない。敵の妖魔の気配はひとつだが、足音は複数入り乱れている。五人、ないし、六人。

——どう戦う？

この場所で妖魔を使えば、誰に見られないとも限らない。そもそも脈動起こらなければ使えない。

「沙穂は経遠さまの箒手をお持ちしております……」そう言つとりユックをおろし、中から手裏剣仕込んだからくり箒手を取り出した。「お手を」

差し出された彼の腕を取り、袖をまくりあげ、からくり箒手を皮紐で結わえ付けた。その様子は、女房気分を楽しんでいるように見えた。

「沙穂、呑気だぞ」

やがて闇の中から駆けてきた六つの人影が、前方をぐるりと取り囲んだ。

中央に黒いニット帽、皮のジャンパーの男。すぐにわかった。こいつが妖魔を佩びている。戦闘員。そして、ガラの悪い五人の男。

戦闘員どころか、三下ですらない。おそらく、下部組織の流用。

沙穂を背後にかばい、敵の出方をうかがった。

「弁えろ^{わきま}」

が、漂うのは問答無用の雰囲気。

革ジャンの男が口を開いた。

「貴様は、誰だ!？」

彼が黙っていると、

「先日ふたり殺られた。あれは、貴様の仕業か？」と言った。

すぐにわかった。それは多分、種遠か、武遠。無言を押し通した。敵は、ふつ、と晒った。

「なるほど、貴様じゃないな。なら理由を言え。なぜ田舎者のお前等が、こんなところをうるちよろしている？」

なるほど、と彼は思った。俺たちが北都京くんだりまで出てきたことが、不思議でしかたないらしい、と。

「都会見物だ」

「ふつ。そりゃあ、さぞかし愉快だろう。手土産だ。やれ」部下に命令した。

一気に襲いかかってきた渡世人風の五人。

睨みすえ、手を一閃さえた。袖口から飛び出した楔型手裏剣が、ふたりの額に命中した。血飛沫をあげ、もんどりうって転がった男ふたり。それを見て、一瞬度肝を抜かれた風の残り三人。

すぐさま罵声をあげて殴りかかってきたが、その驚いた顔を見てわかった。

こいつ等は、獲物が何かも聞かされていない。

躍りかかって来た合計六本の拳を次々とかわした。かわして繰り出す、鉤突き、肘うち、身を翻しての裏拳。どれも一撃ずつで、三人の男を転がした。そのうちひとり、その一撃で昏倒した。

起きあがろうとした男の脳天に、ふりあげた踵を落とした。これでふたり。

猛り狂い大ぶりして殴りかかってきた男の腕を取り、入り身、転

換すると、へし折り、そのまま組み伏せた。そして革ジャンの男へ籠手を向け、親指腹にあるボタンを押した。

からくり籠手から先端にカギ爪のついたワイヤーが飛び出し、その先端の四本のカギ爪が、頭蓋骨を砕こうとする直前、男はかろうじてかわした。

佐畝君が、手首をひねるとワイヤーは籠手に巻き戻された。

「こりゃあ、驚いた」と男は晒った。

「貴様、種遠か、それとも武遠か？ まさか経遠じゃねえだろう」

彼は押し黙った。

「どうした？ 名乗らねえのか？ 俺はハヤヒ（巴耶毘）だ。それでも名乗らねえのなら、技玉勝負だ。さあ、何番だ？ 使ってみろ」と挑発した。

それでも彼が挑まないでいると、

「ならば、喰らえ」とおのが玉を放り投げ、番号を叫んだ。

「六拾参番！！」

——参番！？ 末尾参は毒だ。

焦って記憶をたどっていると、目の前に現れたのは、子供くらいの大きさの、黒い貝。唐傘お化けに似た太い一本の足を持つ。その足の筋は、強力なバネのようなものらしい。カギ爪で地を蹴り跳んで、目の前まで来ると殻の間からノズル状の口を出した。

——まずい。これが毒を噴出す。

咄嗟のことに沙穂を庇い、彼は毒の飛沫を総身に浴びた。

「ふん。使わなかったか。強情な奴だ。まあ、いい。また会うだろう」革ジャンの男は、自分の玉をおさめると、そう言い残して姿を消した。二三步後を追ったが、すぐにあきらめた。すでに足にきていた。

駆け寄った沙穂に笑みを浮かべてみせた。

「大丈夫だ……」

早く立ち去らなければ……、と彼は思った。気絶した男どもが目覚ませばさらに厄介だ。

不安ではちきれそうな顔をして、ぼろぼろ泣いている沙穂に肩を支えられ、やっとの思いでアパートまで戻ったが、そこで意識は途切れてしまった。

タレジがきやがった

東七姫署刑事、川崎分太は、信じられない面持ちで自分の知った事実を、頭のなかで繰り返した。

小柄で優しい風貌は刑事らしからぬものがあるが、刑事としてのバイタリティは人一倍ある。刑事となって十年。すでに充分一人前と言ってよい。

その彼が、こんな馬鹿なことがあつてたまるかと、驚いていた。

先日、北都京埠頭で発見されたふたつの変死体。ひとつは黒焦げであり、ひとつは刺殺体。黒焦げも充分不信だが、刺殺体のほうの凶器は残された傷から日本刀と思われる、実に興味をそそられる事件だが、残念ながら所轄が違うので、彼が捜査に加わることはできない。

が、被害者の身元が判明し、確認依頼が来た。被害者の持つていた免許証では、本籍地、現住所、ともに七姫市。

容易い仕事だと、すぐさま役所に赴き確認したが、目にした戸籍に刑事の勘が何かを感じた。そこで、少し調べて愕然となった。

戸籍とは家系の記録でもある。その男二人の戸籍に、それぞれ両親として記されていた名前の人間は、存在しなかった。つまり、まったく存在しない人間から生まれた男が二人、この世を歩いていたことになる。

偽造戸籍……。そんなことが可能なのか……。驚いていると連絡が入った。この事件に関しては何も調べる必要がない、と。

そして、その翌日、さらに驚くべき事件に出くわす。

その事件は彼の所轄で起きた。すぐさま現場に赴けば、被害者は暴力団員風の男二人。

その額に刺さっていたモノは、どう見ても、時代劇などでよく目にする、楔形手裏剣……。

意識が朦朧としている。夢のことなのか、現のことなのか、わからない。

枕元に、目を泣きはらした沙穂が座っている。種、武、が腕組みして座っている。その横に、ずらりと並んだアルカリ飲料のボトルが目に入る。

——そうか。あれを飲ませて俺の身体の中の毒を流しだしているのだな……。

カヤの姿が目に入った。そのいでたちを見て愕然とした。

「カヤ……。その服は、どうした……」うわごとのごとくつぶやくと、

「買い求めました」とカヤは答えた。

「ボディコンは、やめろ——。マハラジャは妖魔の巣窟である——。沙穂が真似たら、どうする——」

カヤの目が吊りあがったのが見えたが、意識はまたしても霧の中に包まれて行った。

臥した佐畝君を、心配そうに見守る面々。佐畝君のぼろアパートである。

扉が開き、ハナが戻ってきた。

「三毛門はどうした？ 一緒ではなかったか？」種遠が聞いた。

「主君のために奔走している。薬局などを。もっとも、できることなどないが。不安でしかたないのだ。好きにさせておこう——。祖おや元もとからタレジを呼び寄せた。晩には着くはずだ。わたしが迎えに行

く」

敵との戦いで負傷した場合、医者にかかれない場合も多い。そのため彼らのうちから（族）には、医者の家系もいる。特に今回は、町医者になど説明できない毒である。薬物でもなければ、キノコの毒でもない。貝の姿の妖魔の毒である、などと話すわけにはいかない。

タレジは、彼らより年長で三十代。その腕はやぶだが、他に望めない。

「その、迷彩色のズボンは何？」種遠は、彼女の穿いているだばだばの迷彩パンツを見て、眉をひそめた。

「き、気に入らなかったか？ 目についたので買ったのだが――」珍しく亭主に服装を咎められ、ハナは真っ赤になって答えた。が、種遠は言った。

「俺が気に入らぬのでは、ない……」不安そうな顔をした。

その時、佐畝君がうつすらと目を開け、ハナを見つけるとうわごとのように言った。

「なんだ……？ その、男のようなりは……。自衛隊にでも入るつもりか……。このような女房では種チンがつくつく憐れである……」

ハナが、くわっ、と目をむいたが、佐畝君はふたたび夢の世界へ旅立って行った。

「このように、意識を取り戻してはだれかれの服装にいちやもんをつけているのだ」武遠が説明した。

が、それを許すハナではなかった。すでに意識のない佐畝君の耳たぶつかむと口を近づけ、「やい！！ 経遠っ！！ 貴様のこの体たらくのおかげで、わたしは、かわいい竜太郎に会えないでいるんだぞっ。わかつているのかっ」と、怒鳴った。

ハナは二十二歳、種遠は二十三歳。若い夫婦であるが、すでに子を儲けていた。竜太郎という。その、幼い我が子を祖元にあずけてきているのだ。

夜半、そのタレジが到着した。ちょうど目を覚ましていた佐畝君は、うつろだったその眸子をカツと見開き、

「げげっ。貴様、タレジじゃないか！！ 貴様に診られるくらいなら、死んだほうがましだ」と、動かぬ身体をのけぞらせ、布団から這いでようとした。

その身体を力ヤが押さえつけた。

「兄上。あがいてはなりません。大人しく治療を受けなさい」

「いやだ。薬は効かぬし、注射は下手だし……。こいつに診られたら、良くなるものも良くならない」回らない舌で必死に抵抗した。

タレジは薄ら笑いを浮かべ言った。

「ふっふっふっ。当然だ。なにしろ俺は免許がない」と、驚くべきことを恬然として言つてのけ、脈を取ろうとその手を伸ばした。佐畝君が怯えて腕をひっこめると、むんずとその腕つかまえて、
「じたばたするな。脈を取るだけだ」と叱りとばした。

ようやく観念した佐畝君の脈を取り、さらに聴診器を当て、診終わると、啞え煙草で注射器を取り出した。

「おい。貴様、それはあんまりだろう。啞え煙草で注射を打つつもりか！？」

「暴れるな。手元が狂うぞ」と脅し、佐畝君の腕押さえつけ、ぶすつと針を刺した。

「あとは薬を用意してやる。真面目に飲めよ」紫煙くゆらせながら言った。

その佐畝君が眠った横で、種遠、武遠がタレジに聞いた。どうなのだ、と。

タレジは、ふむとうなずいて言った。

「五拾参番の毒は、厄介だがそれで死ぬことはない」

もとは同胞ゆえ、敵の妖魔もすべて知れている。もつとも、それは敵にしてみても同じことである。

「それより、使い手のほうが厄介だ。昔から末尾参の所有者は、おのれの技を磨く。妖魔では勝敗が決まらんからな。まあ、ハナの亭主に言うことじゃないが」

ふつ、と種遠は笑い、

「沙穂の話によれば、その男はワイヤーアンカーを避けたそうだ」
敵が強いことを伝えた。

「知られたからには、また襲ってくるかも知れん。経遠だとばれたのか？」

「いや。経遠は最後まで技玉を使わなかった。おそらくは、まだ……」

「だが、お前たちのうち誰かが上京してきたことは知られた。ハヤヒと名乗ったその男も、それに気づかないほど間抜けじゃないだろう。奴らにしてみれば、殺したかった相手がすぐそばまで自分から来ている、ということになる。今頃は、その情報が駆けているだろう。用心したほうがいい」

「となると沙穂が心配だ。連れて帰ってくれるか？」

「ああ。ついでにハナも連れて帰ろう。竜太郎が恋しがっている。

まあ。薬が効けば明日には起きあがれるだろうが、一週間は痺れが抜けんだろう。お前たちで見てやれ」

そばで黙って聞いていた沙穂が、ポツリと言った。

「嫌です……」

その言葉に、種遠、武遠の顔が青ざめた。

「経遠さまは、沙穂が看ます……。帰りません……」

この娘を説得するには、ゆづに一週間はかかる。種遠、武遠にもそれはわかっていた。ゆえに青ざめた。

が、ハナ、カヤには、沙穂がそう言うだろうとわかっていた。男たちの話を聞きながら、「大人しく帰るわけないだろうが。馬鹿たれども」思っていたのだ。

特にカヤは親友である。だからわかりすぎるほどわかっていた。
心のなかでほくそ笑んだ。

——ちょうど、いい。兄は沙穂に看てもらって、わたしは都会見物
でもしよう。マハラジャ、行ってみたかったし——。

「わたしは、帰る。竜太郎の顔が見たい」とハナは言った。

が、誰も聞いていなかった。種遠も、武遠も、言葉巧みに沙穂を
説得しようとしていた。その種遠の頭を、ハナは小突いた。

「おい。女房が帰ると言ってるのに、寂しくないのかっ」

うから（族）／おやもと（祖元）／うつほ（空）――

翌日、佐畝君が目覚めると、部屋のなかには、沙穂とタレジがいなかった。幾分意識がはつきりしていた。

「みんなは……？」

「所用で出かけております……」沙穂が微笑みながら答えた。

「少しお加減がよろしいようですね……」

「うん。多少は……」と答えると、嬉しそうな顔をした。

「まあ、一週間は痺れが抜けん。大人しくしてろ」煙草をふかしながらタレジが言った。

見れば灰皿の中がこぼれんばかりの吸殻であふれている。

「おい、貴様。床が汚れる」と言ったら、

「こんな汚い部屋で、何を気にするんだ？」と答えた。

「経遠さまが起きあがれるようになりましたら、沙穂がお片づけします……」と沙穂が言った。言われて気づいたが、幾分部屋が綺麗になっている。しかも、安物のパイプベッドが消え、彼は床に敷かれた布団に寝ていた。

ぎよつ、となつて、

「おい、ベッドは？」と聞くと、

「底が抜けておりましたので、種遠さまと、武遠さまが、捨てておしまいに……。こんなモノに寝せておつては、病人が治らぬ、と」

それを聞いて呆れたが、まあ、しかたないか、とあきらめた。

「今朝、ハレゾから連絡が入り、種遠と武遠はちよつとした仕事を任された。で、出かけている。まあ、大した仕事じゃないから、明日には戻ってくるだろう。三毛門は隣の部屋にいる。俺が持ってきたお前の鎖帷子に細工を施している。頭巾の中に、トランシーバーを内蔵するんだ。すでに、種遠と武遠の鎖帷子にも、同様の細工をしてある」

トランシーバー、云々、はどうでもよかった。

「あれは、嫌いだ。余計なものを持つてくるな」文句を言った。が無視された。

「ハナは竜太郎の土産を買いに行った。ハナが戻ってくれば、俺も帰る。礼は、いい」

礼、云々、の話は聞き流した。沙穂に聞いた。

「カヤは？」

沙穂は言いくそうに口を開いた。

「マハラジャへ……」

「なんだって！？」驚いた。

「第一、あの服装で入れてもらえるわけないだろう」ジーンパン、だった。

「召し物は用意しておりました。経遠さまも見られております……」

「ボデイコン、を着たのか！？俺は見えてないぞ」

「ご記憶にないのは、臥せておられましたから……」

「あそこは神をも恐れぬ高慢な女どもの集うところだ。根拠もなく自分を貴人と思っていて、金と外車を持たない男は、人間以下にしか思わない——」

「カヤは女の子ですから、無用の心配かと……」

「あそこにいる女を見れば、ハナが女らしく見えてしまう——」

「わたしが女らしく云々とは、何の話だ！？」扉が開き、入ってきたハナが言った。思わず、ぎくり、となった。

タレジが笑いながら言った。

「まあ、経遠がひどい目にあつた、って話だ」

「待て。勘違いするな。俺はあんなところには出入りしてない」

「バレバレ、だ」タレジは断じた。

「それよりも、ハナが帰ってきたところで、大事な話がある。帰る前に聞いておかないとな。実は数日前、種遠も襲われたと言っていた」

なるほど、と思った。あの男が言っていた。二人、殺された、と。種遠は相手を始末した。だから種遠であることは知られていない

と思う。お前はどうか。ハヤヒという男に、経遠であることを知られたか？」

技玉勝負を挑まれたとき、脈動を感じていた。けれど使わなかった。貝が現れた時も、使えば防げたがしなかった。だが、相手は気づいていた。

「三人のうち、いずれか、ということとは気づいていた」

「やはり、か……」と、タレジは紫煙噴出し、煙草をもみ消した。

「まあ。用心はしておけ。一日も早く養生して、祖元（おやもと）へ帰って来い」

祖元（おやもと）へ帰る、という部分に彼がうなずけないでいると、

「いい加減観念しろ」と言われた。

ハナが枕元にきて、彼の頭をくしゃくしゃとつかみ、

「じゃあ、わたしたちはうから（族）の里へ帰る。竜太郎が待つておるからな。喜べ。また、沙穂と二人きりぞ。まあ、その身体じゃ、なにもできぬだろうが、な」と言った。

言われてはじめてその事実気づき、むむむ、とうなった。

——種チン、武チン、は明日にしか帰らない。しかしカヤがいる。

——いや、待て。ほんとに帰ってくるのか——。マハラジャから——。

「まあ、思うに任せぬ体で、というのもなかなか良いかも知れぬ」
大口開けて笑いながらハナは出て行った。

「するかっ！」と枕を投げつけたが、扉に当たっただけだった。

沙穂をちらりと見ると、頬を染めてうつむいていた。

またしても。二人きり、——。

夜更けて彼は、ふと目を覚ました。気づかないうちに眠ってしまったようだった。

真横に沙穂の顔があり、ぎよっ、となった。が、沙穂も眠っていた。枕元に座ったまま、突っ伏すようにして。

ずっと眠ってないのかもしれない、と彼は思った。沙穂なら当然
そうするだろう、と。

身体を起こしてみると、くらくらと眩暈がした。まだまだ本調子
ではないらしい。足にも腕にも痺れが残っている。

が、沙穂を抱えるくらいは簡単だ、と、その小さな身を抱きかか
え、敷き布団に横たえた。
うえから毛布をかけた。

その寝顔をしばらく見た。

沙穂なら……。と、いつも思うことを思った。

多少、変わったところはあるけれど、沙穂なら、どんな相手でも
選び放題だ。資産もある。勿論、資産に惹かれるような男を許さな
いが、少なくとも、俺のような男じゃない――。

幼い頃から、沙穂が苦手だった。けれど、これだけ慕われてにく
く思えるわけがない。

が、けれど、と思う。いつか、沙穂がこの気持ちに気づき、この
思いをくんで、自分から離れていくことを願う。出奔が失敗した以
上、それを願うほかない。

――とは言え。

――この状況は別だろう？

――なぜ、こんなに理性を試される？

彼は窓外を睨んだ。

――なぜ、カヤは、まだ帰ってこない……！？

時はさかのぼり、前日のこと。

種遠、武遠の二人は、首都北都京に潜伏中のうから（族）の者と
密かに会った。彼らのうから（族）の者のうち、現在首都に潜伏し

ている者は八名。いずれも種遠らより年長である。二十代後半から三十代。とは言え、その持つ玉の番号はずっと小さいうえ、現在は玉を持たず潜伏している。

説明すれば、番号の大きさは妖魔の強さに因る。経遠らが持つ八十番代ともなれば、ほぼ最強に位置する。

その継承は、親から子へ、つまり血縁に因る。

しかし、実子であれば継承できるかと言えば、そうではない。彼らは、赤ん坊が生まれたとき、それを見分けることができる。継承者が、否か。継承者であれば、すなわち、彼らの言うところの、戦闘員、となる。昔は単に、兵（つわもの）と言っていた。

さて、そのうからの者と会い、報告を受けた。

敵、その動向を。

大まかなところを聞いただけでも、事態は憂慮すべきものと思えた。想像はしていたが、と眉をひそめた。

最後に、敵組織の名を尋ねると、いまだ、わからぬ、と答えた。墮ちた龍、と彼らが仮に呼んでいるそれは、もとは同じうから（族）だった。江戸の世の末、開国とともに、袂を別った。彼らが山中奥深くに、ひっそりと潜む一方、分派は大きく世へ出た。現在では、どこまで肥大したか、その全貌がつかめない。

ただ、その戦闘部隊を束ねる一族の名前だけはわかっている。族首（うからおびと）。我らこそは、うからの長である、という、倣岸さが感じられる。

彼らのうからは、源平の合戦にそのたんを発し、その祖（おやは古事記の昔にさかのぼるという。

古くは、うつほの族（うから）、と呼ばれ、もののふ武士の武將たちは、龍のうから、と呼んでいた。

カヤ、マハラジャへ、まゐる

種遠が首都密偵らと一日行動を共にするというので、武遠は一人で帰ることにした。数度鉄道を乗り換え、七姫市行きの特急に乗り込んだ。

乗ってすぐに気がついた。大声で怒鳴り散らしている、人相卑しい酔客に。

その顔は赤黒く、酒で赤いというよりも、垢であるかもしれなかった。着ている服は汚らしく、コップ酒を手にしている。

迷惑な奴だ、と思いつつ目をやれば、向かいの席には若い女性が座っていた。瞳に涙をため、うつむき、身を凝こらせて、立ちあがることもできないでいる。

あの娘を怒鳴っているのか！？ と驚いた。

どうした！？ なぜ、誰も助けてやらぬ、と見回したが、誰も彼もそ知らぬ顔をしている。

酔っ払いはますます調子に乗って、罵声あびせている。その度に娘はびくつと慄ふるえている。

俺がやって良いことではない、と思いつつも立ち上がった。

その前に立ち、話しかけた。その娘、とは言わなかった。

「お嬢さん」と言った。

その娘が顔をあげた。すぐるような視線に、安心するよう微笑を返した。

「席を、替わってもらえますか？」

信じられない面持で、その娘は何度もうなずいた。よほど怖かったのだろう。やっと、逃れるきっかけを得て、席を立つや、足早に車両の隅まで行った。そして、不安げに、こちらの様子をうかがっていた。

突然のことに、酔っ払いは迷っているようだった。怒る、にしては、彼は見るからに屈強だ。

俺が、怖いか、と思うと、余計に腹が立つた。彼はその酔客の前にどすつと座ると、その顔の横の背もたれを、蹴とばした。靴底が、赤黒い顔をかすめた。退路をふさぎ、

「どうした？ 続けてみる」と言った。

酔客は、口をぱくぱくさせて目をそらし、しゅんとなった。が、七姫市に到着するまでの十五分間、その姿勢のまま、ずっと睨みつけた。

列車を降りると、その娘があとを追ってきて、何度も何度も頭をさげた。

礼には及ばぬ、とは、言わなかった。

「気にしないでください」と言った。一度、頭のなかで変換しなければいけないので、口数は減るが、普通にしゃべることもできる。

ただし、無用の接点は控えるべきであり、すでに充分おせっかいをした、と、立ち去ろうとすると、きゅっ、と服のすそをつかまれた。

まるで経遠に対する沙穂のようである、と思い、ふり返れば、精一杯の勇気をふりしぼってそうしたことが、瞳から見てとれた。その手をふりはらい立ち去ることができなかった。

娘は、野添コハルと名乗った。まるで、我がうからの女子のような名だ、と思った。

彼は、タケオと名乗った。

その同じ日、とっつぶりと日暮れた頃。

—— やっと見つけることができました。

カヤは、外つ国とくにの文字で『MAHARA』と書かれた看板を見つけた。

その入り口は無数の電球が瞬き、中へと誘っている。胸躍らせて足を踏み込めば、奥へとつながる鏡張りの通路。そこに映る自分の姿を見て思う。

—— この恰好なら恥ずかしくはないはず。
さらに、

—— 我ながら、似合っているじゃないか。とも。
が、髪型が違うような気がした。そこで、後ろで結わえていた紐を取った。違和感がなくなった。

黒服の男が二人、立っていた。彼女を見て、中へ、通した。

—— よし。通された。

安堵したが、後ろから来ていた奇妙な風体の男も、簡単に通されたのが気になった。

中は真っ暗で、ブラックライトのあかりに照らされた幻想的な空間だった。だが……。

爆音のように鳴り響いていたのは、

—— これは、兄様がよく聴いていた、……。

—— せつくすびすとるず!?

フロアでは奇妙な風体の若者たちが、狂ったように跳びはねている。

—— あれは、兄様のミュージックビデオで観た……。

—— ぼごだんす!!

—— なんと、マハラジャとは、このようなところであっただか——!?
彼女は驚いたが、これは、なにかの間違いである。

ともあれ気を取りなおし、さっそく酒をたしなんでみようと、彼

女は思った。カウンターへ赴き、以前から飲んでみたかった、もすこみゅーるを注文した。

グラスを渡されたところで、さっそく声をかけられた。若い男二人が、なにやらしつこく話しかけてくる。

——これが、噂に聞く、ぎやるなん——。

こういう場合どう処するべきか、兄から聞いていた。

彼女は、中指を突き立てて見せた。

カヤ、ネリーザエレファントに舞う

由季恵ちゃんは、ライブハウス帰りにそのデイスコに立ち寄った。そこはマハラジャと同じビルで、マハラジャのワンフロア下にある、パンクロックがたくさん流れるデイスコだった。

一緒に来た友達とは、すぐにナンパされて姿を消した。笑顔で見送ったが、不愉快に感じて、カウンターで一人コーラを飲んでいた。彼女は興味ない。

ピストルズが好きだからと言って、ピストルズと同じ恰好をしたガキが好きなのではない。こんな場所をふらつきながらも、こんな場所で群れている男の子たちに、興味が持てない。

少し話してみればわかる。自己中で、意志が弱くて、頭が軽くて、やりたいばっか。俺が俺がと自慢するけれど、群れてなければなにもしかない、そんな奴ばかり。

そうは言っても、ここにいれば当然のごとく声をかけられる。一応あしらいは慣れいるつもりだったが、その二人組みはしつこかった。ガラも相当悪かった。らりってるのかも、ちよつと怖くなり、立ち上がり背を向け歩き出そうとすると、後ろから肩をつかまれた。

なに、これ！？ はじめての経験に身が縮んだ。なにをされるかわからない恐怖が、体を凍らせて、助けを求めて周囲を見回したけれど、誰も気づいていなかった。が、次の瞬間。

男の手が肩から離れた。ふり返って見れば、そこには。

鋭い眸の髪の長い少女。

明滅するフラッシュライトの中、小さな拳が鋭く飛んで、男二人の顔を強打した。あっけなく倒れた男二人。

由季恵ちゃんは目をみはった。が、危ない、と心のなかで叫んだ。男の一人が立ちあがったのだ。が、次の瞬間。

真っ暗なホールに、ネリーザエレファント爆音のごとく流れる中、

少女はジャンプすると、竹とんぼのように足を回して、男の頭蓋骨に、回し蹴りを叩き込んだ。男の体が半回転するほどの勢い。

ネリーザエレファントの曲の切れ間にさしかかり、静まり返ったホール。目にした人は皆、あっけにとられている。そして、ふたたびはじまるネリーザエレファント――。少女が、はいつくばった男二人に向かって、中指を突き立てた。歓声があがった。

由季恵ちゃんは、その少女の顔に見覚えがあった。

――佐畝君を捜していた子だ……。

何度も断ったけれど、強引に手を引っぱられ、喫茶店に連れて行かれ、カフェオレに、チョコパフェに、チーズケーキをふるまわれた。

無碍に断るわけにもいかず、と言うよりも、むしろ好物のそれらをばくついていると、相手の女の子は、由季恵と名乗った。

え！？ と驚き、でもまさか、そんな偶然あるわけないと思っ
ていると、

「この間、佐畝君を捜していたでしょう？ あなた、佐畝君のいも
うとさん？？ なの？？」と相手が言っ
て愕然とした。

――じゃあ、この人が、兄様と、ほ、ホテルに行ったという、由季
恵ちゃん??

俄然、確かめなければ、と思った。沙穂は嬉しそうな顔をして、
「なにもなかったと仰ってくださいました……」と言っていたが、
信用ならない。我が兄ながら。アパートには、エッチな本もあった。

「兄と、仲が良いんですか？」と聞いてみた。まずは、ジャブ。

「仲が良いってほどじゃあ……」と由季恵ちゃんにはっこり笑った。

その女の子は、不思議な感じの子だった。話す前に必ず口ごもり、一瞬考えてからしゃべっているようだった。

超むかつく最低野郎、あの、遠野佐畝の妹だった。

その偶然にびっくりしたが、ちょうど、いい、と思った。彼について、聞きたいことが山ほどある。

が、口を開こうとしたら、逆に聞かれた。

「そ、その。兄から聞きました。ほ、ホテルへ一緒いただいたとか……」

かあつ、と頭に血がのぼり、目を見開いて憤慨した。

どこまで、サイツターな奴なの！？ 妹に自慢するなんて！！

敵を皆殺しにした／衆人環視のそのなかで

由季恵ちゃん、からは結局なにも聞き出せなかった。彼女はにっこりと笑い、門限を理由に帰ってしまった。たとえ聞き出せたとしても、本当のことを言うとは思えない。何かあったとしても、当人の妹には言えない事柄である。

——ううん。兄上。

夜空を見上げ、兄を恨んだ。

——このままでは、あまりにも、沙穂が憐れです……。

サクラ町まで戻ってきて、駅前ベンチに武の姿を見つけた。

なにをしているのだ、と訝しく思った。

なにやら物思いに沈み、一人、ぽつんと座っている。その大きな体が、心なし小さく見えた。

野添コハルと別れたあと、武遠は一人ベンチに座り、その面影を脳裏に描いた。寒風吹きすさぶなかそうしていても、寒いとは感じなかった。それよりも、現実のほうが辛かった。

数日後には祖元^{おやもと}へ帰る。その間だけで良い。現身^{うつしみ}ではなく、夢に身を置きたい、と。

が、彼に訪れたのは、現実のほう。すでに取り囲まれていた。彼は敵技玉を感知できない。気づいたときには六人の男の姿が目の前にあった。

座したまま、敵の出方をうかがった。

一人が口を開いた。

「貴様か？ ハヤヒが言っていた男は」

その一言で、経遠を襲った奴とは別の奴とわかった。

なんと答える。敵が組織的に動き始めている。次の一言で、何かが決まるような気がした。

「で、あれば……？」

「名乗れ。種遠か？ それとも、武遠か？」

不敵に晒い答えた。

「武遠である」

「もう一人、いるな。誰だ？」

「教えると、思うか？」

違う奴が口を開いた。

「ああ。ぜひ、聞きたい。『^{そら}旻』の名を持つ三枚の宝剣、龍のうから五百年の計、その満願日が近い。妙な野心でも持ち合わせたか？」
敵のかんぐりに失笑した。

「もとは同じうからならば知っていよう。それは、まだ、二十二年も先の話だ。」

今ごろから何を恐れている」

「ふつ。恐れてなどいない。それに、うんざりだ。変なしゃべり口調がうつちまう。話さないのなら用はない。もう、死んでくれ」

その台詞を合図に三人の男がふところに手を突っ込んだ。

ここで使うか！！ と目を剥いたそのとき。背後に出現した巨大な金属の塊りが、大きくその口を開き、鋭い牙でその三人を噛み砕いた。路上に、飛び散る血。流れ落ちる臓腑。

「カヤ！！」それは八拾五番の妖魔。カヤのもの。

男たちの背後にカヤが姿を現した。幼い顔立ちに似合わない、ボデイコンシャスな服を着て。

残った三人の男がナイフを抜いた。一斉に、彼女に、そして武遠に襲いかかる。自分に襲いかかってきた一人を、たちまちのうちに殴り殺して、武遠は叫んだ。

「カヤ！！ 退け」

彼女を狙って二人の男がナイフをふりまわしている。退け、と言

ったのは、おのれの技玉を使うため。

遅い時間とは言え、多くの人間が見ている。が、事実が荒唐無稽であればあるほど、

ニユースは信憑性を失う。

「八拾四番！！」青白く巨大な水の塊が出現した。これは命じれば、命じた姿になる。

「龍！！」たちまちのうちに姿を変える水の塊。巨大な龍の姿となつて駅舎前に立ちあがつた。

「八拾貳番！！」合わせ技である。八拾貳番は、単独で使えば稲光する球形の電撃。両者合わせれば、帯電する水の塊りとなる。

もうひとつ、彼は八拾七番を持っている。が、これはその技を及ぼす範囲が広すぎてあまり使う機会がない。彼が使える妖魔はみつ。それは彼らのなかでも驚くべき数であつて、ハナ、カヤらはひとつ。種遠、経遠らでさえ、ふたつだ。

カヤがすばやく退いた。男二人は水の龍に飲み込まれ、その凄まじい電撃に焼き殺された。

「武、武、早く。技玉あらためを」

慌てふためくカヤが言い、二人はぐちゃぐちゃになつた死体のふところを検めた。

「あつた！！」

「こつちもだ！！」

敵の玉みつつを探り出すと、顔を見合わせ、足早にそこを逃れた。

ノストラダムスの大予言である

「ごめんなさい。兄様。ごめんなさい」と泣きながら力やは繰り返した。

「もとはと言えば、俺が悪い。あんな所に一人でいた俺が……」武遠が自分を責めた。

「二人とも自分を責めるな。襲われたことはしかたない……」となくさめた。

敵が動き始めていることがわかった。報復の連鎖が起きている。多分、次の攻撃はもつと――。

それは、こうなつては、この町を離れることは難しい、ということの意味した。事態はこちら側の都合で収拾できない。もう、どう動いてもおかしくない。

奴らは里の場所を勿論知っている。襲つてこないのは、宝剣の隠し場所を知らないためと、あまりにもリスクが大きいため。

だが、今回すでに十人殺した。対して、こちらの被害は零。身にかかった火の粉を払うためとは言え、このまま帰れば、なにが起るかわからない。最悪のことを、奴らが考えないとも限らない。

――そもその発端は、俺の出奔にある……。

そのことが及ぼす累を、まったく考えていなかった。いや、考えたつもりだった。逃げ回っていれば良いと。だが、甘かった。知った。

こんなうからなど消えてしまえばいい。昔は安易にそう思っていた。が、それが現実味を帯びれば、翻った。知った。

うからの存続は関係ない。目の前にいる見慣れた顔の人間を、やすやすと、殺させるわけにはいかない。

自分の手で、無駄な火は消しておかなければならない。平和的な決着があるのなら、それをさぐる――。

その前に、しなければいけないことがある。

佐畝君は後ろに座る沙穂に向き直り、やさしく言った。

「家へ……」言い終わる前に沙穂は言った。

「嫌です……」

佐畝君は、秘策を口にした。

「俺が、送っていく」

とたんに信じられない面持ちで、じっと彼を見つめる沙穂。

「経遠さま、それは本当に……？」

やさしく、うなずいてみせた。

「では、経遠さまと、新幹線に乗って……」

「お弁当を食べたり、滑稽本をまわし読みしたり……」

いちいちうなずいてみせた。

そうしながらも、頭のなかは今後を考えた。

まず、種遠と連絡を取り、武遠、カヤと合流させ、アジトをかまえ潜伏させる。このアパートは引き払う。手に入った敵の技玉は、三毛門に里まで持ち帰らせる。が、となると乃那賀（ノナガ）県までは三毛門と同行することになる。となると沙穂はきつと機嫌を損ねる。二人きりでない、と知ったら。

沙穂には伏せておこう……。

立ちあがった青白く光る龍——。出現した恐竜の頭部に似た金属の塊り——。

東七姫署刑事川崎分太は、一報を受け現場に向かいながらも、それらの目撃証言をまったく信用していなかった。

が、現場について愕然とした。

引き千切られた死体。そして、雷に打たれたように、衣服が焼け濡れた死体。

死体は、それらがそこにいたことを物語っていた。

——ノストラダムスの大予言まであと数年。これは、その前兆なのではないだろうか……。

七姫スポーツ事件部記者の田所イサムは、サクラ町駅駅舎前にたずみ思った。

この男の語り口調は、一見して佐畝君らのそれに似ているように思われるが、まったく異なるもの。すなわち、古典劇風。ものすごく無理やり説明するとすれば、古代ギリシャ人が日本語をしゃべればこうかもしれない、といった感じ。一言で言うなら、勇壮。口調は勇壮であるが、大したことはなにも言わない。

「この記事が没とはどういうことであるか」

「我々には報道する義務があるのである」まあ、こんな感じ。

どう育ってこうなったのかはわからない。

その彼が、昨夜サクラ町駅前で発生した事件現場で心配している。ノストラダムスの予言の予兆ではないかと。

ともあれ、予言まであと約十年。真面目に働いても馬鹿らしいのである。と、ひとりごちた。

が、結末をここで明かせば、予言の刻限を過ぎてもなにも起こらず、彼は七姫スポーツ編集長となっていて、予想もしていなかった残りの人生をどう生きるのか、懊悩しているのである。

が、それは本編とはまったく関係ない。

北都京駅の雑踏に姿を現した、佐敵君、沙穂、ミケの三人。

沙穂がミケをたびたびふりかえる。ミケにもその意味するところは充分わかつている。その度に申し訳なさそうな顔をして頭をかく。沙穂が袖を引っ張り小声で聞く。

「三毛門さんを召し連れているのはなぜですか……」見上げる目が今にも泣き出しそうだ。

「武チンとカヤが手に入れた敵の玉を、祖元（おやもと）まで運んでもらうのだ」と説明した。だが、それで納得した風ではない。今回手に入れた敵の技玉は、貳拾八番、参拾貳番、五拾四番であり、これをうからの里へ運ばせて、おびと（首）ハレゾに封印させる。

敵との戦いはおのずと技玉争奪戦となる。それはこの世に九十九個存在し、うち二十四個が失われている。戦いの結果消滅したり、敵に奪われて封印されるなどして。

現存する技玉の残りは七十五ヶ。その約半数ずつをお互いが所有する。

それは彼らの遠い祖が、調伏した妖魔を、細い紐で幾重にも封印したものである。

その強さに応じて番号が割りふられ、性質によって末尾の番号が決まる。たとえば彼の七拾四番、武遠の八拾四番はともに水の妖魔であり、末尾四番。種遠の八拾壹番は焰の妖魔であり、末尾壹。カヤの八拾五番は金属の末尾五。その他にも、末尾九では鍊金術系、物理現象系。末尾零では、天。などという理解しにくいものもある。九拾番までは彼らに使える妖魔だが、九拾壹番以降のそれは、調伏はしたものの使うことができない妖魔である。それを使える血脈は、彼らのなかには現れない。無論、敵も同様である。

が、たとえ使えなくとも、それを所有することは絶対的優位であり、過去の奪い合いの結果、四つを彼らが所有し、四つを敵が所有している。ひとつ余る。

残るひとつは九拾九番であり、それは最後（いやはて）の魔物と呼ばれ、現在のところ行方不明となっている。

手足の痺れはほぼ消えている。だが、時折、頭がくらりとするが、大したことはない。平静を装い、お弁当選びに付き合った。

沙穂を送り届け、磯崎翁と少し話がある。

祖元（おやもと）へ帰るのは三毛門だけであり、彼は帰らない。

古く黄ばんだ龍の絵

座席に座ると、沙穂の機嫌はすっかり良くなった。

そこは指定席で、佐畝君と沙穂が並び、通路を挟んで三毛門が座ったのだが、沙穂はその頭のなかで、二席だけの異空間を創りだしたようだった。嬉々として彼の弁当を広げ、次いで自分の弁当も広げ、かいがいしく世話をやいた。

様々なことに思い及び、彼が箸をつけかねていると、「あーん」と言つて、箸でにんじんを口に運ぼうとした。

さすがにそれを許すわけにはいかず、むっ、として口を閉じると、悲しそうに目をふせた。

屈して口を開いた。周囲の視線が痛かった。

乃那賀（ノナガ）県乃那賀市――。

なんの変哲もない市街地の一角に、古く大きな武家屋敷がある。

ひっそりと佇むそれが、磯崎翁の自宅である。

沙穂を送り届け、座敷へ通された。そこでしばらく待たされた。欄間に古く黄ばんだ龍の絵がかかっている。

彼は幼い頃からその絵が気に入っていた。龍、と聞けば、その絵が浮かぶ。もう、相当古いもので、絵の具の色彩が抜け、黄色い龍のように見える。

絵を見ながら、この家の暮らし向きに思いが及ぶ。

磯崎翁は関連十二の企業を束ねているが、財界では孤立気味である。中心となる会社の、独自の技術力は高く評価されているが、商売上手とは言えない。この、節操のない世にあつて、侍然とした経営では下向くばかりなのかもしれない。

その磯崎翁が姿を現した。

仕立ての良い背広姿で、髪も髭も白い。小柄であり、厳格という

よりは、穏やかな雰囲気の翁である。

あまり気に入られたくない彼は、座布団にあぐらをかき、モッズ
コートのポケットに両手をつ込んで待っていた。

それを叱ることもなく、翁は笑みをたたえて言った。

「ハレゾは元気か？」

「元気だ。五十あまり一歳いそとせになつた」

「そうか、わしは七十歳ななとせじゃ」と笑つた。

「経遠よ。ひとつお前に聞きたいことがある」そして、こう言った。

「沙穂のどこが気に入らぬ」

相手の方から切り出された本題に、勿怪の幸いと、

「全部に決まつてるだろうが。鈍い爺だ」吐きすてた。

「容姿も、性質も、その振る舞いも、なにもかもだ。恬としたところも、我執であつて考えを曲げないところも、親同士の許婚なんてくだらないものを、盲目的に慕うところも気に入らない。おのれがない」

今日こそは、最後通告。そのつもりだつた。

翁は目を丸くして聞いたが、すぐに穏やかな笑みを浮かべた。

「どうした？ 孫をこれだけそし謗られてなぜ怒らない？」

「さて。わしには、可愛くてしかたがない、という風にしか聞こえぬが」

「勘違いするな。俺は本気だ」

彼が睨むと、翁は諭すような口調でこう言った。

「経遠よ。お前の考えていることはわかる。じゃが、の。あの子にとってはお前のそばにすることが幸せなんじゃ。お前の女房になれる十六を心待ちにしておつた。さあ、どうじゃ。女房にしてやつてくれんか？」

「断る。俺の女房になどなつて、幸せなことなど一つもない。それくらい、判れ」

「判るとも。それがお前の本音じゃ。じゃが、沙穂にとっての幸せは、それじゃ。他のすべては意味なしごとじゃ。それくらい、お前

も判れ」

くちびるを噛んだ。かろうじて、こう言い返した。

「判らない。考えを改めさせろ」

翁は、ふっふっふ、と笑い、

「まあ、どうやら結論はでぬようじゃ。次に会うときは、結納の話でもあればうれしいが」

翁の言葉に、思わず目をそらした。

「そんな呑気なことを言っているばあいか。事が起こりかけている」それを聞き、さすがの翁の顔も曇った。

「そうか……」

「俺が、きっかけをつくった。止めなければ……」

座敷をあとにしてそのまま帰ろうとしていると、使用人に呼び止められた。お嬢様がいとまごいをしたいそうです、と。そこで、沙穂の部屋に向かった。

沙穂の部屋は、フリルとぬいぐるみでいっぱいかと思いきや、そうではない。質素でなにもない、畳の間。文机と筆笥だけ置いてある。

部屋に入ると、座って待っていた。てっきり、なにか話があるもの、と思い、正面に座ったら、手に耳かきを持っていた。それで、なにがしたいのかわかった。

最後と思い、従ってやった。

地下駐車場の剣戟

――技玉など持って、北都京に乗り込むのではなかった。

種遠は悔いていた。潜伏中の八名は、技玉を佩びていない。万が一にも、敵に感知されないうえだ。

――だが、出奔した経遠を丸腰のまま、敵只中に放り出しておくわけには、いかなかった。三日で捜しだし、連れ帰るつもりだった。

――経遠は、悪くない。奴の気持ちはわかる。奴は沙穂を好いている。はじめは逃げ回っていたが、思いに折れたのだ。俺たちも、わかってから囃し立てる……。

――が、奴は思いすぎるのだ。それがあだになった。

――技玉が、自身の半径百メートルくらいまでに、入ってくれば、感知できる。奴は逃げ回っていたのだろ。俺も知るべきだった。敵がこれほど堂々と跋扈していることを。

――だが、いさかいはこれが初めてじゃない。訝しい。なぜ、今回に限って奴らはこれほどむきになる……。

種遠は、用意したアジトをあとにして、武遠、カヤと落ち合うべく、七姫駅前に向かった。七姫市郊外にそれをかまえた。

もはや、こうなつては、武装していないことは命取りになる。ギターケースに日本刀を隠し、技玉を佩びた。日本刀は、武、カヤの分も入れた。

待ち合わせ場所で、落ち合うと同時に、それを感じた。敵、技玉。早い、どうなっている……！ 目をむいた。

敵のその動きは信じられない早さだ。

「技玉がよつつ。足音は十人以上――」口早に二人に告げた。入り乱れる足音は二人にも聞こえているはず。

「ここはまずい」三人顔を見合わせた。

迎え撃たなければしかたない。だが、ここはまずい。まだ、夜も早い時間の駅前の雑踏のなか。一度きりなら、ありえないことと笑って済まされるが、二度、人の目に触れればそれは真実になる。ここで玉は使えない。

「移ろう」

三人申し合わせて、駆け出して、その場を逃れた。

ふりきれるところだと思っていない。駅裏の、人気ない地下駐車場を見つければ、駆け込み、中央に陣取った。車の数はまばら。薄暗く、広大なその空間。

種達はすばやくギターケースを開いた。なかから取り出したのは、いずれ劣らぬ妖刀三本。その二本を武達と力やに渡し、残る一本を自身が手にした。種達のそれは妖刀冥雷。

三人鞘を投げ捨てて、地下入り口を睨み据えた。

やがて現れたのは十三の人影。

一人は女。まっさきに目を引いた。おのれが妖魔であるかのような顔をしている。

今一人は悪趣味なゴールドのネックレスをジャラジャラつけた背の低い男。若いくせに毛皮を着ている。

そして、もう一人、皮のジャンパーにニット帽の男。技玉を持つのはこの三名。他は三下の兵隊である様子。

一人が担いでいたゴルフバッグをおろし、全員がその中に潜めていた日本刀を手に取った。革ジャンの男のみ両手ナイフが得物。

革ジャンの男が口を開いた。

「ありやあ？　こりゃあ、どういふことだ！　俺が会った小倅がいない。そしてここに三人いる。ということは、だ。お前たちはいったい何人いる！？」

その言葉でわかった。こいつがハヤヒ（把耶毘）。経達を襲った毒の貝の男。両手ナイフがうなずける。おそらく、相当の使い手。

「聞いてるだろう。俺はハヤヒ（把耶毘）。俺が会った小倅は誰だ？　そして、お前らは誰だ？？」

「カヤである」凜とした声でカヤが言い放った。すると相手は驚いた。

「こりゃあ、驚きだ。ハレゾの娘か。じゃあ、経遠もいるのか!？」

「残念だったな。俺は種遠だ」

「武遠だ」

二人が名乗ると相手はますます驚いた。

「じゃあ、こないだのガキが経遠か!？ こりゃあ、惜しかった。

殺せば大手柄だった。けれど、まあ、種遠、武遠、カヤを殺せば、

これまた劣らぬ大手柄だ」

「大人しく、殺されるとでも思っているのか」カヤが言った。

「この場所で、他にしたいことがあるのか？」

悪趣味のきんぴか男が口を開いた。

「お前は女だ。特別に聞いてやらんでもない」と下卑た笑みを浮かべた。

鋭く目を光らせて、カヤは睨み返した。

「貴様は？」種遠が言った。

きんぴか男が答えた。

「把式^{わに}」

さらにその横の妖怪じみた女も名乗った。

「わしは、ノツチじゃ」

その名に、三人一様に心のなかで驚いた。ノツチ。名前だけは聞いたことがある。ふたつ技玉を使えるという。話では、ひとつは毒蜘蛛の妖魔。

「さあ、贅沢な二者択一だ。やるのか？ それとも……、やるのか？」含み笑いを浮かべてハヤヒが言った。

全員、脈動を待っている。それぞれの、おのが技玉のそれが、敵より先に起こるのを。睨みあいながら。

はじめはノツチだった。

「七拾参番!」叫んでほうった。現れたのは壱メートルほどの蜘蛛の妖魔。カヤに向かって口から糸を吐きかけた。それは毒入り。

カヤは跳び避け、そのときには放っていた。

「八拾五番！！」

現れた金属の塊りが牙をむいた。が、ノツチは避けた。牙は宙を噛むとカヤの手に戻った。

いつせいに躍りかかる日本刀の群れ。薄暗い地下駐車場の電灯の下にひるがえった。倒れたカヤに襲い掛かったそれを、武遠が盾となりなぎ払った。

打ち込まれる刃を弾く三本の妖刀。激しいその剣戟の音。が、数人を切り伏せたが、そいつらは手だれぞろいだった。

さらに、ふたたびノツチが蜘蛛を放つ。

「七拾参番！！」

速いつ。なぜ、こんなに脈動の間隔が速い！？ 驚きつつも種遠がほうつたのは、

「八拾壹番！！」 焰吹き上げる溶岩の龍。

糸を焼ききり、蜘蛛を喰らおうとしたが、一瞬早く蜘蛛は姿を消した。龍はさらに駆け、把式、ハヤヒに躍りかかったが、いずれも避けられ、炭に変えたのは、三下の戦闘員二人。日本刀をかざした黒焦げの死体がそこに転がった。

ならばと、味方二人に小声で言った。

「目を閉じろっ」

この状況で目を閉じれば即死。だが、二人とも種遠の言った意味を理解した。目を閉じなければならぬものが、ここに出現する。

三人、いつせいに退くと、ぎゅっと目を閉じた。馬鹿が、と襲い掛かる日本刀の群れ。

「七拾九番！！」

種遠が叫んだとき、その号数を知る、ハヤヒ、ノツチ、把式、は目を閉じた。現れたのは、半身蛇の女の妖魔。

目にした者を石に変えて、姿を消した。林立する、刀をかざした石柱。一気に静まり返った戦場。

その石柱を碎きながら、牛のように突進し、ノツチに襲い掛かつ

たのは武遠。

が、応じるノツチは末尾参の使い手。とても女とは思えない身のこなしで、武遠の豪腕かわして、剣戟を繰り出す。

そして、もう一人の末尾参の使い手、ハヤヒが種遠を襲う。種遠の叩き込む白刃の下をかくぐり、間合いに飛び込むや、二本のナイフを躍らせる。その鋭さは、まさに稲光が走るよう。目くらましさえ使うらしく、種遠は何度もジャケットを切り裂かれた。

一方、カヤは、把式を襲った。その男は、さっきからなにもしていない。にやにや晒って、戦いをただ見ていただけ。

そのいやらしい毛皮のコートめがけ、白刃ふるうが、切り裂くのは残像。なかなか捉えることができない。

そして把式がほったのは、

「七拾八番！」上半身だけの巨大な鎧武者。その体は岩石。

鎧武者は腰に佩いた剣を抜くと、その駐車場のコンクリの床に突きたてた。

大音響とともに、沈み込んだコンクリ。突如出現した大穴。ゆうに幅約十メートル。駐車してあった車を飲み込み、カヤ、武遠の姿が消えた。

その様子をあざ笑う把式。が、

一瞬早く跳び退っていたカヤが、車の陰からハヤヒに襲い掛かった。種遠と刃を交えていたハヤヒは、これにたまらず一旦退いた。

ノツチ、把式、とともに、穴のふちに立って、こちらを晒い、下を見下ろした。

「武遠は、穴に落っこちたか??」

その穴の底から武遠の声が届いた。

「種、カヤ、背後に回れ」

即座に動く、種遠とカヤ。そして、何事かを感じ、身構える、ハヤヒ、ノツチ、把式。

身構えたその三人の目の前に現れたのは、大男の武遠が使うには似つかわしくない、可愛らしいハリネズミの妖魔。大きさは子犬く

らい。それは、八拾七番の妖魔。末尾七の特性は冷氣。

ハリネズミが背中 of 針を逆立てた。

とたんに、その前面に広がる放射状の凍結地帯。コンクリを凍らせ、石になった人間を氷柱に変え、居並ぶ太い柱を次々凍らせ、その技は、駐車場入り口をゆうに越え、周辺の建造物にまで及んだ。

何台もの、車の急ブレーキの音と、激突する音が響き渡った。

が、そこにはすでに、ハヤヒ、ノツチ、把弑、いずれの姿もなかった。ハリネズミを目にしたとたん、姿を消したと思われた。

武遠が穴の底から登ってくるのに手を貸して、ほっ、と息をついた三人。

ギターケースに妖刀を隠すと、顔を見合わせ、その場を逃れた。

その翌日――。サクラ町駅前――。

駅前の雑踏のなかで、野添コハルはひとり待っていた。顔を曇らせ、不安で胸をいっぱいにして。時々、目頭が熱くなる。

なぜかはわからないけれど、その人が来ない気がする。

なぜ、その人が来ない気がするのか、その根拠は何なのか、それは自分でもわからない。

では、週末に、と約束した。あの日、この場所で、別れた直後に、あの事件が起こった。

あの事件と、彼を結びつけて考える根拠はなににもない。勘が働いたわけでもない。

けれど、彼女にもわかっていることがある。

――あの人は、普通の男の人じゃない……。

――あの人が、自分の人生からこのまま消え去ってしまったら、一生あきらめきれない……。

だから、待っている。けれど悪い予感が的中したように、その人は姿を現さないまま。

三時間後……。

暗い空から、冷たい雨が降りはじめた。景色を煙^{けぶ}らせるように。濡れそぼっていると、その人は、物陰から姿を現した。

その顔を見ただけで、不安がパズルのように重なって、自然と答えが出たけれど、そのことはもうどうでも良かった。

その人が、自分の人生から消えてしまわなかった、そのことだけがうれしくて、気づかないうちに涙になっていた。

『箭内幸甚幻怪と話す／敵組織名判明』まがいぬ』

北都京某所の豪邸が並ぶ住宅地――。

彼はタレジが持つてきた、自分の鎖帷子に身を包んだ。それは表面に特殊な加工が施してあり、周囲の景色を映し出す。鏡のように目にした人は、人の形に歪んだ景色を見る。

技玉、箆手、ナイフ、何一つ身に着けていない。丸腰で、話し合いに向かう。

その男が、敵幹部であることは、知れ渡っている。堂々としたものの。顔を晒し、姓を晒し、この国の中心部に居る。

与党共和党、下院議員、箭内幸甚。五十二歳。

戦争が、はじまってしまえば、忍び込むことなど不可能事。が、今なら、その警備も手薄。

白く高い塀を乗り越えた。庭先に降りたち、立ち木の陰に身を寄せた。闇のなかに静まり返る日本家屋を見据えた。技玉の気配はない。

明かりがついている部屋がいくつか。その、何所か。

静まる邸内にそつと身を沈めた。一人ずつ、警備員を昏倒させていく。十分後。

その男を見つけた。

どこか昆虫を思わせる歪んだ眼に、歪んだ口元、染みだらけの赤黒い顔。肥えた身体で静かに座し、文机の前に、筆を走らせている。気配に顔を見あげ、そして室内に侵入した歪んだ影に気づいた。

「その装束はっ！？ き、貴様！！ 経遠っ！？」

泡を飛ばして立ちあがった。

「殺しに来たかっ！？」

「慌てるな。話し合いに来た」静かに答えた。そして、人を呼ぼう

とした箭内の機先を制した。

「無駄だ。誰も残っていない」

それを聞くと、悪辣奸智で知られるこの男も、さすがと思える剛胆なところを見せた。胡坐をかいて座りなおすと、言った。

「何の話し合うことがある」

「今すぐ、兵を退け。そして、馬鹿なことを考えるな。そうすれば、俺たちは帰る。そして、手出しはしない」

不敵な面構えで、箭内は晒った。

「馬鹿が。こっちは二十人殺されている。今さら手を退けるか」

「知っている。だが、退け。俺たちは、ふりかかった火の粉を払っただけだ」

「で、里へ帰るだ！？ そんな虫のいい話があるかつ」

「わかつている。だが、退け。俺たちは争いを望まない」

「大法螺吹きがっ」箭内は口を歪め、唾を飛ばし怒鳴った。

「爪をとぎ、時を待つつもりだろうが、そうはいくか。精霊の宿る三枚の宝剣、龍のうから五百年の計。その満願日まであと二十二年。その時を待つつもりだろうが」

やはり、その話か、と思った。こいつらは、それを懼れているが、それは誤解だ。

「聞け。それは、思い違いだ。あれは、そんな性質のものじゃない」

「まだ言うかつ。それが、貴様の妖刀に従うことくらい知っておる。化け物をつき従えて攻めあがるつもりだろうがっ」口角を飛ばした。

「今のうちに叩き潰してやる」

「俺たちを、皆殺しにできているのか？」そう聞くと、相手の動きが止まった。それは、あまりに非現実的な話。

「できると思っているのなら、やればいい。が、その時は必ず、生き残ったものが二十二年後に牙をむく」

箭内の歪んだ目が、闇のなかに沈んだ。

「俺の要求は、戦争回避。それだけだ。返事を聞こう」

箭内はしばらく黙っていたが、やがて答えた。

「帰れ。返事は近日中にわかる。そして、二度と来るな」

三日後、アジト――。

シャッターをおろしたそこは、もとはガレージショップだったその店舗。

そこで、沈鬱な顔を見合わせているのは、佐畝である経遠、そして、種遠、武遠、カヤの四人。

万一を考え、首都潜伏中の八名と連絡を取った。技玉を佩ぶることと、すぐさまこのアジトへ集結すること。

が、それ以降、まったく連絡が取れず、誰一人として現れなかった。まさか、これが奴の回答か、と、彼はくちびるを噛んだ。

そして、翌日発見されたみつつの死体。

報道されたその名前は、紛れもなく行方不明の密偵たち。その戸籍名。おそらく、残る五人もすでにいない。

彼は、憤怒に目を燃やしながらも、うつむいた。

――甘かった。戦争回避など。これが、奴の答えだ。

が、違っていた。それは、そのあと、すぐわかった。

がたん、と音を立て、その時、そこに、倒れこむようにして現れたのは、皆焼^{ひたつら}。彼らより年かさ。首都密偵の一人。刃の波紋を名に持つ屈強な男だが、今は深手をおい、息も絶え絶えに、血のにじんだ腹を押えて現れた。そして、慌ててその身体をささえた彼らに言った。

「経遠、種、武。やつらの名がわかった。奴らは、『まがいぬ』と名乗っている……」

「まがいぬ、……！？」

「魔物の『魔』に、『牙』。そして天狗の『狗』。奴らはすでに、その名から龍を消している……」

そして、内ポケットからフロツピーディスクを取り出して、彼に渡した。

「これを。すでに種遠にも見せたが、判明した敵幹部、戦闘員、その技玉、そしてアジトが記録してある」

そして、苦しい顔をゆがめて笑うと、

「仇を討つてくれ、と言いたところだが、こいつらはでかい……。貴様に任せる。経遠。うからを護れ……」

そう言い残し、崩れるように身を落とし息絶えた。

そしてそこへ飛び込んできたタレジ。その状況に驚き慌てて皆焼の身体に手をあてたが、あきらめたように首をふった。

そして立ち上がり、彼らに口早に告げた。

「ニユースは、見たか。磯崎翁刺殺された。北都京のホテルで」
目をみはる彼らに続けて告げた。

「沙穂はすでにうからの里へ保護したから心配するな。そして、聞いてくれ。磯崎グループ全社の株が半年前から買い占められていた。わからないように。昨日乗っ取られた。その意味がわかるか？」

わかった。甘かった――。

彼は、目をみはったまま、うつむき、コンクリの床を睨みつけた。
乾ききった目に、涙がにじんだ。ほんの少しだけ。

――奴らは、すでに、それを、はじめていやがった。半年前に。数日中にわかるとは、このことだ。

謀反語り

乃那駕（ノナガ）県、乃那駕市――。

その日、すでに差し押さえられ、明日には人手に渡る、旧磯崎邸の大座敷に、若きうからの兵（つわもの）ら三十余名が集結した。ハナ、カヤらの姿も含み控えるのは、思い思いの平服に身を包んでいるが、いずれ劣らぬうからの兵ら、二十余名。玉の使い手。

その後ろに控えるのは、三毛門はじめとする、玉を使えぬ兵ら、十余名。

さらにその後ろには、腕組みした医者タレジ、そして禅僧野臼。彼ら爪牙と相対して上座に座るのは、うからの古老数名、そして種遠、武遠、そしてその中央に、経遠。いずれも平服。

色の抜けたえんじ色のトレーナーのうえに、着古したオリーブ色のコートをはおった経遠が、畳の上に拳をついて頭を下げ、そして語りだした。

「諸子においては聞かれたし。かつてのはらから、あの堕ちた龍、その組織名が判明した。名乗ること『魔牙狗』。政界、財界は言うに及ばず、各省庁、その関係機関、地方行政府、さらには非法法組織まで、網の目のようにその血脈を張り巡らし、この国に巣くった巨大な龍である。その全貌はようとしてつかめぬほど。自衛隊、警察を動かせることは言うに及ばず、族首家を中心とした暗殺部隊も擁する巨大な仇。これに牙をむくことは、すなわち、国家転覆の謀である。惨殺された八名の兄弟、そして磯崎翁の無念を晴らすため、我ら、鬼神となりて、これを倒す。

「が、これより行う我らのふるまいによって、我が族（うから）の名が穢されることがあつてはならぬ。ゆえに今日より我ら黄牙竜と名乗る。敵がその名に『牙』を含むなら、我らも含むまで。全ての作戦遂行はこの名のもとにおいて行う。

「さらにこの経遠、そして種遠、武遠、は、その姓に黄牙わうがを名乗る。これにより、経遠が妹力ヤ、種遠が女房八ナ、もまた黄牙姓となる。全ての作戦遂行は、この黄牙五名が中心となる。そのことについて異存あれば、聞く」

大座敷を打つ三十余名の「なし」の声。経遠、さらに頭をさげ、
「さらに、謀反の覚悟を聞く」

ふたたび大座敷を打つ「おう」の声。

経遠、頭をあげ、声を改め、続けた。

「これより、国家転覆の謀議へ移る。敵幹部のうち判明している者はこの九名。下院議員、箭内幸甚。下院議員、江口誠。下院議員、白川弘之。下院議員、津崎登。上院議員、松下康祐。上院議員、佐藤秀雄。上院議員、田中広信。『東亜朝報』を擁する新聞王、武知晋太郎。大日本憂國党党首、佐武辰郎。最終的にはこれら全員の暗殺をもくろむ。

「敵戦闘員のうち、氏名の判明している者とその使う玉をこれより伝える。族首家頭首、氏名不明なれど、その玉は九拾番、そして、八拾六番。鍛人かぬち、八拾八番、と八拾番。ノツチ、七拾参番、と今ひとつは不明。ヲトイアカゲ（陽兔衣）、玉は不明。邪耶や、六拾八番。鎖蛇さた畏、六拾五番。銅俱アカゲ、七拾壹番。把式わに、七拾八番。ハヤヒ（巴耶毘）、五拾参番——。

「さらに、行方不明の九拾九番。その搜索を行う。これを手に入れることは最優先事である。その搜索には三毛門を中心とした三名をあたらせる。

「初戦は奇襲攻撃である。奴らの闇の部分を担当する組織、大日本憂國党。国土を装い、その実、あらゆる非合法活動に手を染める集団。無論、その構成員は、魔牙狗戦闘員。技玉を使う者も多数含まれる。そこを奇襲で襲う。では、作戦の詳細を伝える——」

北都京へ発った三十余名といったん別れ、佐畝君は一人うからの里へ戻ってきた。

そこは外界から隔絶されたような山奥ではあるが、別に結界が張ってあるわけでもなんでもない。誰でも自由に出入りしようと思えばできる。近くには幹線道路も走っている。どこにでもあるような山里。木造の小学校の姿もあり、車で通り過ぎる人は、そこがそうであるとは気づかない。

三ヶ月ぶりの故郷である。あの時は、赤く色づき始めた山々を背に旅立った。今は、小雪が舞っている。山々は水墨画のように、その峰を沈めている。

自分の家に戻ったが、母屋には入らず、道場へ向かった。

思ったとおり、そこに一人でいた。父である、おびと（首）ハレゾ。板の間のうえに座り、瞑目している。その前に、立った。

彼は告げた。

「始めた」

「うむ……」ハレゾは目を開き、うなずいた。

「貴様に任せる」と言った。が、

「一言だけ言っておく。怒りに我を忘れ、卑劣なふるまいで心を貶めるな」と言った。

その言葉を、口を歪めて笑った。

「甘い。それでは奴らに勝てない。俺は、この地上で、もつとも残忍な龍になる」

睨みあった。視線が絡んだ。

「沙穂はどうする……」ハレゾは静かに聞いた。

「捨てる」即答した。

「人を想う心を捨てることなどできぬ」

「できる。ここで、大切に、看てやってくれ」

ハレゾはふたたび黙した。

「奴らは俺たちを皆殺しにするつもりでいる。ここが襲われることもありうる」

「すでに、備えておる。案ずるな」

「奴らは三枚の宝剣を恐れている。これをはじめたのは、全てそのためだ」

「で、あろうな」

三枚の宝剣。剣であるのに、三枚と呼ぶのは、それが剣に似せた小さなものだからだと、彼は聞く。懐刀よりもっと小さいと。実物を目にしたことはない。それは、五百年前の彼らの祖おや、イヤハテの魔物を封印した人物が遺した物だという。その宝剣には精霊が宿り、五百年の後に人の姿を得るといふ。その五百年目が、二十二年後にせまっている。

「それは、化け物なのか？」

「いや、童の姿で現われると聞く」

「それは、奴らを倒すのか？」

「それは、そんな性質のものではない」

「奴らはそうは思っていない。きつと、ここに奪いに来る。奪っても、奪えなくても、皆殺しにするだろう。沙穂を、護ってやってくれ」

ハレゾは静かにうなずいた。

「会ってゆけ。母屋におる」

「頼んだぞ」と言い残し、道場をあとにした。

母屋へ行くと、沙穂は縁側に座り、ガラス越しに、小雪舞う庭をながめていた。手には読み止しの本があった。彼に気づくとうれしそうに笑った。

向かい合って座り、

「寒くはないのか？」と聞いた。

「ちつとも寒くはありません……」と言って、にっこり笑った。

が、その笑顔が不自然に思えて、黙っていると、沙穂は白状した。「沙穂はみつつ、心に決めました……。経遠さまの前で泣かない……」

…。経遠さまに甘えない……。経遠さまにわがまを言わない……。」「
沙穂を想う、心を捨てるつもりで来た。が、わかった。それはハ
レゾの言ったとおり、無理だった。

やさしくうなずいてみせ、「みつつとも、この俺が許す」と言う
と、沙穂はうなだれて、ぽとぽと涙を落とした。

血塗れた妖刀抜き連ね／大日本憂國党壊滅

北都京――。

大日本憂國党本部事務所――。

その扉を開け、入ってきたのは、モッズコートの経遠。米軍フライトジャケットを着た種遠、武遠。背中に色鮮やかな髑髏紋様が入った革ジャンを、そろいであつらえた、ハナ、カヤ。

訝しげに睨む男たちが口を開く前に、どかつ、とおろしたゴルフバッグの中から、五本の妖刀抜き取って、鞘をはらった。

これには、居合わせた男全員が度肝を抜かれ、目をみはり、あんぐりと口を開けた。凍りつき、黙した空気。

が、ようやく一人が咽喉から声を絞り出すようにして、

「貴様らっ、正気かつ!？」と立ち上がった。

その一声に、我を取り戻した男たちが、我先にと得物を求めて立ちあがった。

が、その時には部屋の中央に斬り込んでいた、経遠、種遠、武遠、ハナ、カヤ。その手のそれぞれの妖刀に、すでにたつぷりと血を吸わせていた。彼らが駆け抜けたあとに転がる七つの屍^{かばね}。血で染まった床。

激昂し、猛り狂った男ら。怒号満ち、奥から、そして階段からももろともに兵隊が現われ出で、ドスの群れがちらちらと光り、部屋にあふれ、ひるがえった。

そのなかで、経遠、種遠が示し合わせて狙ったのは、技玉を佩びた者。敵のなかにその気配を見つけるや、脈動起こすいとまを与えず、真っ先にうち殺した。

切り伏せられたその一人が、

「き、貴様ら、技玉は……!？」と言いながら頼おれた。その台詞で、こいつは感知できる奴、と知れた。

「佩びてない」と吐きすてた。

あとは烏合の衆とばかり、血刀ふるう、五人。真っ赤になって猛り狂い、罵声飛ばす男らを、次々と血飛沫ちしぶきに変えてゆく。その姿は、まさに昨日経遠の吐きすてた、残忍な龍、その化身そのもの。

血を吸えば、血を吸うほど、切れ味冴えるそれぞれの五本の妖刀。五人各様の剣さばき、その働き。

わけてもハナの働きは凄まじく、「ハナ、功を求めな」といさめる経遠を、「甘いわあ、経遠つ」と一蹴にして、血塗れた妖刀ふるうその姿は、女に応化おみなした戦神そのもの。彼女もまた、末尾参の使い手。その手の妖刀泥蝶でいようは、血を吸えばぬくもり帯びる地蔵の波紋。

そして、妖刀鵬虫の、ふくら枯れるその切っ先で、次々敵の咽喉を切り裂くカヤ。

群がる敵を、なぎ払う武遠。

黙々と、悪鬼のごとく斬り続ける経遠、そして種遠。経遠のそれは、妖刀双蛇牙。

「国賊があつ」とわめき、斬りかかってきた男を、一太刀で退け、「国士を騙る賊が」と逆に吐き残し、次々敵を切り伏せる経遠。血に染まったオリブ色のコート。血飛沫の中を躍る淡い金色の髪。

もはや人影まばらとなった頃、黒ずくめの男二人に護られて、外へ逃れようとする党首佐武辰郎の姿をハナが見つけた。

「逃がすかあつ!」と身を宙に躍らせて、二人の男をたちまちのうちのうち倒し、党首辰郎の白髪頭をなぎ払った。どつ、と倒れたその魔牙狗幹部を見おろして、がっ、と晒った。

「討ったぞおつ!」

さすがに逃げ腰だった残党も、親を殺され激憤し、死力を尽くして立ち向かってきた。

が、ものの一分。

血にまみれた床のうえに、屍かばねを重ねた。訪れた静寂。立ち込める血のにおい。連なる屍が、儀ことわりなき様を語る。

五人は鞘を拾いあげ、それぞれの妖刀をおさめた。示し合わせていた通り、経遠、種遠が、屍のふところをさぐり、五ヶの技玉を奪った。そして、入ってきたとき同様、無言でそこをあとにした。

事務所前に、滑り込むように横付けされた、二台の黒塗りのセダン。すばやく身を潜めるように乗り込むと、発進させ、車載電話で経遠が号令した。

「^し為とげよ」

報を受けたのは、五人ずつ、四組に別れて潜んでいた黄牙竜の兵。同じく妖魔を佩びず、それぞれ、都内四ヶ所の憂國党事務所にうち込み、たちまちのうちに壊滅させた。

そして奪った敵技玉は計八ヶ。

経遠らと合わせて計十三ヶの妖魔を奪い、初戦の奇襲を成功させた。

こうして敵の一組織をほぼ壊滅させ、大量の兵隊を失わせ、敵幹部一名を殺し、敵妖魔の半数近くを奪った。

が、これを受け、敵はアジトを次々と移し、その後は、索敵、殲滅戦となる。すなわち、玉を感知できる者が、敵を探りだし、あるいはおびき出し、一人ずつしとめる局地戦となる。

竜巻に巻き込まれた地下鉄／族首頭首フツ

東七姫署、刑事、川崎文太は、信じられない思いで、その、右翼団体襲撃事件を聞いた。

「いったい、なにが始まった!? と。なにが起こったんだ、ではなく。直感的に、それが、始まりであることを感じた。」

そして飛び込んだきた別の大事件。

地下鉄事故。

が、通常の地下鉄事故ではなかった。一報をもたらした同僚刑事は言った。

「負傷した運転手の話によると、線路上に竜巻が発生していて、そこに突っこんだらしい……」

——地下鉄のトンネル内に竜巻だと??

耳を疑った。

仕立ての良い高級スーツ。時計、靴。そして、サングラスの奥の残忍な目。サングラスをのぞけば、一見してエリートビジネスマンのように見える男。二十代半ば、と思われる。その男を、ここまで追ってきたのは経遠。

真つ暗闇の地下鉄のトンネルのなか。

追い詰めたのか、誘い込まれたのか、どちらかはわからない。その男は、足を止めると、向き直り、薄ら笑いを浮かべた。

経遠は、その男の持つ玉から、これまでに感じたことのない妖気を感じていた。

——これは、号数が高い。俺が持つものよりも。

彼が持つ妖魔は七拾四番と八拾九番。九拾壱番以降は使えないこ

とを考えると、必然的に敵が持っている玉は、九拾番。

——族首、か？
（じゅうしゅうあひて）

無言で睨みあっていると、まばゆく光るライトと耳を聳する轟音。反対の路線を、地下鉄が通り過ぎていった。

暗闇が静寂を取り戻したとき、男が口を開いた。

「さすがだな。君たちは。君がひよつとして、経遠か。それとも種遠？ 武遠ではないな。奴は大男だと聞いた。それに感知できないらしいからな」

物言いは柔らかいが、節々に見え隠れする、倣岸、尊大、高慢……。

「俺は経遠だ——」

名乗ると、相手は、闇のなかでいやらしい笑みを浮かべた。

「そうか。君が経遠か。会えてうれしいよ。見事な奇襲攻撃だった。我々は大打撃だ」

言葉の内容と裏腹な、虫唾走るその笑み。闇の中でもわかる。

「貴様は、族首頭首か」

「なら、なんだ？ なにか聞きたいことでも？」

「まず、名乗れ」

男は、ふつ、と晒い、答えた。

「戸籍名は族首だが、いわゆる私たちが言うところの本当の名は、フツ」

フツとは、古くは太刀を意味する言葉。

「君たちは黄牙竜と名乗ったのか」

「なら……？」

「いや、」と言って、ふたたび、ふつと晒った。

「歯医者を紹介したくなるよ」

睨み据え、晒い返した。

「貴様らを噛み砕くのは、清い龍の牙じゃない。毒の牙だ」

「なるほどね」と言って、また晒った。

足の下で線路が、蠢動を始めた。靴の底で感じる。遠くから、近

づいてくるその音。

「どうだい？ 技玉をほうつたら。もつとも、君の八拾九番を使ったら、あの列車はどうなるんだろうねえ」そう言つて、いやらしく晒つた。

「君の八拾九番は重力を操る。だろう？ 重力操作された空間に、突っ込んだ列車は、いったいどうなるのか、見てみたいよ」

彼は、脈動を感じていた。ずっと。が、それは八拾九番ではない。ほうり投げた。

「七拾四番！！」

現われたのは、一見してドーム状の逆巻く水の塊り。が、前面にマンモスの鼻のような長い水の鞭と、湾曲した大きな牙を持つ。妖魔が、水の鞭を一閃させた。

男は飛び退つて避け、水の鞭はコンクリの柱にあたつた。表面のコンクリが砕け、中の鉄筋が裂けた。

男の姿が消えた。が、晒い声は響いている。

「近々、うちのホープを紹介するよ。もつとも、扱いづらい男でねえ。変わり者だが。気に入ってくれるとうれしいよ」

そして、晒いながら男が放つたのは、九拾番ではなかつた。九拾番は、ここでは使えない。それは、彼も知る。

「八拾六番！！」

現われたのは、獅子の体に龍の頭と尾を持ち、背中に十二枚の翼を持つ妖魔。全身を茶色の体毛が覆っているが、腹は龍の腹、うろこ。

——くそつ。あの列車はどうなる。

結果に慄然としたが、防ぐ手立てはなかつた。

妖魔は、一個の竜巻を起こし消えた。末尾六は、風。

眩いライト。警笛。そして急ブレーキの音。彼は、飛び退つて反対路線へ逃れ、柱の影に身を伏せた。

そして、脱線した列車。地震のようにゆれる、身体のしたの地面立て続けに起こる、耳を聳する破裂音。飛んでくる金属片。

静寂と暗闇が訪れたとき、言うまでもなく男の姿はなかった。男の消えた闇を睨みつけた。

闇のなかは、けが人の声で満ちていた。

が、暗闇のなかでうめいている、無辜の人々を助けもせず、彼もまた、姿を消した。

七姫製菓、新入社員、小祇健迅

七姫市、サンデーマーケット食品売り場――。

七姫製菓新入社員、小祇健迅^{おすみたけはや}は、サンデーマーケットのお菓子売り場で、棚替え応援にかりだされていた。とんだ業界に入ったものだ、とぶつぶつ言いながら。

彼は、七姫市地場中小企業である、七姫製菓、その営業社員である。つまり、小さなお菓子会社のサラリーマン。自社せんべいを手、問屋を回るのが仕事。そして、要請されれば、こんな風に、スーパーの仕事のお手伝いもする。

――こうして人件費を浮かしやる。

小売業界は、メーカー、問屋の営業を使って、人件費を浮かす。今回は、新装開店セール。

――いったい、今年何回目の新装開店だ。ふざけてやるのか。

新装開店で安売りして客を集めるが、スーパーは決して、安売りをかぶらない。チラシ広告に、『がんばります』と書いていても、がんばっているのはスーパーではない。通常、百円で売っているものを、八十円で売ったとしても、損をするのはスーパーではなく、メーカー側。その差額は、メーカーに押し付けられる。その商品の卸値が、七十円だったとしたら、スーパーが、メーカーに支払う商品代金は、その差額を引いた、五十円、である。これは、安売りしましたから、五十円しか払いません、というわけだ。

――しかも、それを、勝手にやりやる。

今回は事前に話があったが、日本全国で同時多発的に勃発する安売りを、コントロールすることなど不可能事。自然、勝手引きが常態化している。

――あこぎで、理不尽な業界だ。――あくどさにかけては俺の組織とどっこいどっこいだ。

しかも、会社にはサルがいた。天皇がかった社長にほぼ全権をゆだねられ、キーキーわめき散らすサルが。

工場長のくせに、営業に口を出すなど朝飯前、その溶解寸前の脳みそで考えた、思いつき程度の営業戦略に、全営業が辛酸をなめている。

——ひでえ、会社もあつたもんだ。——もつとも、営業も営業だ。サボってパチンコ打つことしか考えてねえ。ひでえ奴は、就業時間中に風俗だ。そのくせ先輩面しやがる。

その時、上着の中のポケベルが鳴った。それは、会社から支給されたもの、ではない方。

——くそつ。俺は忙しいんだつ。このあと日報も書かないと、サルがうるさいんだ。

が、サルは怖い、フツはもつと怖い。彼は思いなおして、公衆電話をさがした。

七姫市、サクラ町某所——。

七姫スポーツ、記者、田所オサムは、そのガレージの前で足を止めた。

彼がそこを訪れたのはまったくの偶然。この近辺を取材していて、そこにも人が住んでいるようなので、話を聞いてみようと思ったのだ。龍を見たかもしれないのである、と。

そこは、シャッターのおろされた、もとはガレージショップだったと思われる一軒の倉庫様の建物。

シャッター横の扉を叩くと、年のころは高校生くらい、かわいい女の子が顔をのぞかせた。が、彼が、七姫スポーツの記者である、と名乗ると、少女は、

「お話しすることはありません」と言っ、て、扉を閉めてしまった。

「取材拒否とはけしくりからなのである」と言ってみたが、その扉が開くことはなかった。

少し不審に思わないでもなかったが、そこはノストラダムスの信奉者、真面目に働くのは馬鹿らしいのである、とうそぶきながら立ち去った。

ハナ、残忍な龍を殴打する

北都京、中心部――。

経遠、ハナは、連れ立って、若者たちでにぎわう通りを歩いていた。そこは都心に近く、彼らが歩き回るには不適切な場所。

索敵^{さくてき}。妖魔を佩^{さく}び、ナイフを身に潜めている。敵をおびき出す、あるいは、さぐり出す、そして一人ずつ仕留める。

彼は、種遠とハナを組ませるつもりだった。が、ハナは言った。「亭主と一緒にだと恥らってしまう。腕が鈍るではないか」

それを聞いた武が不用意なことを口にして、どつかれた。

が、そこで人選を変更した。種遠、武遠、カヤと、彼、ハナ、の二組。他の二十名は、技玉を佩^{さく}びず、敵幹部に張り付き、暗殺の機会をうかがっている。彼が号令すれば、すぐさま実行する。

「しかし、惜しかったな」ハナが言った。先日の族首^{うからおびて}の話である。「二人であれば、殺せていたものを」

無言で、うなずいた。

あの時、地下鉄駅構内から、線路へ飛び降りた奴を、彼は一人で追った。ハナは、人ごみに阻まれて、追ってこれなかった。遅れて追いかけたが、分岐点で違う方向へ行ってしまったそうだ。

「フツと言ったか？ で、ふつ、と晒^{さら}ったのか？」ハナは笑い、「しょうもない奴だ」と吐きすてた。

つられて、彼も笑みが浮かんだ。

「で、歯医者へ行けと抜かしたんだな？」

「いや、紹介してやると」

「紹介してもらえ。わたしも黄色い牙は、なんとなくいやだぞ。貴様のネーミングセンスはなっていない」

「堪^{いじ}えろ。黄龍^{きりゅう}ではどうしてもあの絵を思い出す」

「あれか。沙穂の屋敷の」

ハナにもすぐわかつたらしい。

磯崎翁の武家屋敷の欄間にある、古い龍の絵。もともと、あの絵を思つての名、だが、黄龍としては、あの絵が穢されるような気がしたのだ。

「あれは、清い龍の絵だ」彼は自分の思いを語つたが、ハナにはどうでもいいことのようにだつた。店先にあつた服を手に取り、広げた。気に入つた様子に見えたので、疑問に思つて彼は聞いた。

「先日買った迷彩パンツと、その迷彩パンツはどう違うのだ？」

「貴様の目は節穴か？ まったく意匠が違うではないか。そんなセンスであるから、変な名前をつけるのだ」

「あまり、変な名前、変な名前と言ふな。少しは、気に入るように努力しろ」

しておる、しておる、と、ハナはいい加減な相槌を打ち、

「はあ……。竜太郎が恋しいのう」とため息混じりに空を仰いだ。それから、首をふり、

「いかん、いかん。わたしがこんなでは、祖元おやもとで、じつと辛抱しておる竜太郎に面目が立たん」と言つて、ごしごしと目をこすつた。

その様子が、ハナに似合わず憐れに思えた。

「もう、四歳よそとせにはなつたのか？」と聞くと、

「教えてやらん。誕生日も覚えてない奴に」と意地悪く笑つた。

「そのくらいのことをけちけちするな」

彼がむつとすると、

「少しは軽口が出るようになったではないか」と、ハナはにやりと笑つた。

「だいたい、このところの貴様はらしくないぞ」と言つて一発。

「俺は残忍な龍となる、とか」と一発。

「奴らを噛み砕くのは毒の牙だ、とか」と一発。

「経遠のくせしおつて、恰好つけ過ぎだ。ど阿呆」と、さらに一発、彼の頭を殴つた。ばかばか、殴られながら、それに気づいた。敵、技玉。

ハナはまだ殴っている。「経遠のくせに威張りおつて」とか、「経遠が謀反を語るとはちゃんちゃらおかしい」と言いながら。

殴られながら、後ろをふり返った。

人垣で、見えない。

「ハナ、見つけた」

彼が言つと、ハナは殴っていた手を止めた。

「でかした。経遠」

「いや、近づいてきている」

「すると、もしやハヤヒという奴か??」

「まだ、わからん」

敵が感知して追つてきている。ハヤヒかもしれない。

「どこで待ち受ける?」

「考えている。こつちだ」

二人は人ごみをかきわけて走った。そして向かった先は。

こんな都会の真ん中にあるのが似つかわしくない、小さな神社。

人影は皆無。お札所も木戸が閉じられている。

「これは好都合な」ハナが言った。

が、そのとき彼は気づいた。

「ハナ、ひとつじゃない。今、ふたつ目が入った。いや、まだ来る

……。五つ、六つ、七つ」

顔を見合わせた。

「なんと、七つか!??」

そこへ飛び込んだ、六つの人影。

中央にはハヤヒ（巴耶毘）。以前会ったときと同じ黒いニット帽にサングラス。が、今日はオリーブ色のフライトジャケット。そして妖怪じみた面構えの女。種、武、から聞いたノツチと思われた。そして、黒いスーツ姿の屈強そうな男が二人。細身で小柄で、あどけなさの残る少年が二人。おそらく、彼、経遠よりも年若い。

晒いながら、経遠、ハナの前方をぐるりと取り囲んだ。

ハヤヒが口を開いた。

「やはり貴様だったか。経遠」

ハナが小声で聞いてきた。

「こやつがハヤヒか??」

無言で、うなずいた。

ハヤヒが言った。

「その女はなんだ? こないだの女とは違うじゃないか。どっちが彼女だ」

ハナが目をむいた。

「貴様っ。言うに事欠いて、彼女とは何事だっ!! わたしがこの男の彼女に見えるのかっ!! 失敬千万っ。わたしは、種遠の女房、ハナだっ!!」

敵全員が、にたり、と晒った。

「ほう、貴様が、ハナか!? これは運がいい。経遠、ハナを仕留められるとはな」

ハナが、目を爛々と輝かせ、晒った。

「それはこっちの台詞だ、阿呆どもっ。聞いてやるっ。名乗れっ!!」

妖怪じみた女が、愉快げに顔をゆがませて言った。

「わしはノツチじゃ」

——思ったとおり。こいつがノツチ。こいつの玉は七拾参番。そしてもうひとつは不明。経遠は、黙ったまま相手を睨み据えた。

ノツチは余計な冗談も言った。

「貴様の亭主は、わしに惚れよったぞ」

彼はおもしろい冗談だと思ったが、ハナは激昂した。

「種が貴様になど惚れるわけがなかるうっ!!」鼻息荒く気炎をあげるハナを、

「ハナ。挑発しているだけだ。間に受けるな」といさめた。

屈強そうな、黒スーツの男二人が、次々と名乗った。一人目は、濁った赤い目をした男。

「俺は、銅俱^{アカグ}」

銅俱。その名前も知っている。妖魔も。首都密偵がつかんでいた。

——こいつの玉は七拾壹番。彼は、黙したまま睨む。

次は、ポマードでべったりオールバックにした男。

「鎖蛇^{さたい}畏だ」

その名も密偵がつかんでいた。

——鎖蛇畏。六拾五番。

「貴様ら二人はブルースブラザーズでよからう」

ハナが余計なことを言って晒った。

次に名乗ったのは、女のように華奢で、とても戦闘員に見えない少年。「ヲトイ（陽兔衣）」と名乗った。

ヲトイ。名前は密偵がつかんでいたが、玉はわからない。

もう一人の少年はがらつと印象が違い、禍々しい笑みを浮かべていた。「邪耶^{やや}」と名乗った。

その名も密偵はつかんでいた。玉は、六拾八番。

相手を見据え、頭のなかで戦力を確認する。

——厄介なのは銅俱の七拾壹番と、ノツチの七拾参番。——そしてわからないヲトイの玉。それ以外の、五拾参番、六拾五番、六拾八番が、怖ろしくないわけではない。が、なんとかかわせるはずだ。

二対六。技玉の数で数えても、三対七。不利は変わらない。

——どう戦う。

妖怪合戦／巴耶毘、野槌、陽菟衣、銅俱、鎖蛇畏、邪耶

経遠は、まなこ眇めて敵を睨み、ハナは、がつ、と目をむいて晒った。妖魔使いが干戈を交えるにふさわしい、うらぶれた神社の境内。頭上に立ち込める曇天。よどんだ風のなかには、小さな雨粒が漂っている。

睨みあいながら、脈動を待つ九人の妖魔使い。妖魔は好きなときに自由に使えるのではない。戦いを知り脈動を起こすのは妖魔のほう。

はじめに動いたのは禍々しい少年邪耶^や。その狐目に邪気をたたえ、くちびるの端に邪な笑みを浮かべ、ほうった玉は、

「六拾八番！！」

現われたのは小山のような泥蛭^{どろこも}。暗緑色の巨大な身体を境内に横たえた。その口はイソギンチャク状。

頭をもたげ、触手震わせて襲い来た。が、やすやすとかわす二人とび退^{すく}った二人を狙い、泥蛭は、口から泥を吐きかけた。が、これも二人はやすやすとかわした。一気に立ち込める泥の悪臭。

「六拾壱番！！」

蛭の消え去ったあとに現われたのは、渦巻く火柱。それは、銅俱^{アカゲ}の焰の竜巻。経遠がもつとも警戒していた妖魔。

火柱は、縦横無尽に駆け、予測不可能な方向から二人を襲った。泥のうえを転がり、なんとか見切つてかわしたが、火柱が銅俱の手に戻ったときには、経遠とハナは遠く引き離されていた。

「ハナ、二人行った」

「委^{まか}せい」

ハナに襲い掛かる、ハヤヒ（巴耶毘）、鎖蛇畏^{サタイ}。

そして経遠に群がる邪耶、銅俱、ノツチ。

経遠を襲う、都合六本の鋭いナイフ。魚影のようにきらめき、目の前の空間を行き交う。

応じる経遠もまた、両手ナイフ。順手に握ったそのナイフの切っ先で、敵の咽喉を狙う。

またたきすれば、その瞬間、命を失いかねない、接近戦。黒いスーツの男、銅俱の濁った赤い目が、愉快げに歪んでいる。経遠の命を、一掻きで根こそぎ奪い去ろうと、豪腕ふるう。

そして、背後で躍る陰湿な邪耶のナイフ。息をつかせず、死角から飛び込んでくる。

さらに、刃を交えていたかと思うと、さっ、と退き、経遠を絡め取らんと毒蜘蛛を使う、ノツチ。その度に、身を躍らせてなんとかかわしたが、その脈動の間隔の速さに驚かされる。

そして、気になるもうひとりの存在。少年、ヲトイ（陽兔衣）。離れた場所で、おとなしく勝負を見守っている。

――奴が加わらないのは、

――奴の持っている玉に、勝敗を決する力があるからだ。――今使わないのは、脈動を待っているか、今使えば、その技が味方まで巻き込んでしまうか、いずれか。

気にはなるが、六本のナイフが絶えず身体をかすめるこの状況では、手出しできない。

そして、ふたたび放たれた銅俱の渦を巻く火柱。危うくまぬがれた経遠の身体をかすめ、ハヤヒ、鎖蛇畏と刃を交えるハナを襲った。

一瞬早く、ハナはとび退って避け、ハヤヒに向かってその手のナイフを投げた。ナイフはサングラスを貫き、額に深く刺さった。

どっ、と頰おれたハヤヒ。

「やったぞっ。ハヤヒを討った」

ハナは奮然として言い放ち、その亡骸から玉を奪おうとしたが、寸での差で鎖蛇畏に持ち去られた。

そして鎖蛇畏が放ったのは、

「六拾五番――！」

巨大な鎖蛇くさりへび。地を穿ち、のたうつ鋼の体。鎌首のごとく持ち上げ

た頭部を鋭く飛ばし、大きな牙でハナを襲った。

ハナは地面を転がって危うく避けた。

一方、経遠は、仲間を殺され一瞬生じた、銅俱、邪耶、ノツチの動揺を見逃していなかった。

「七拾四番！！」

現われた逆巻く水の塊りが、水の鞭を一閃し、銅俱の身体を真つ二つにした。

どつ、とそこに転がった、ふたつの塊り、流れ出た臓腑。

ノツチがそのふところを探り、銅俱の七拾壱番を回収した。そして、邪耶とともにとび退つて退き、フトヤに並んだ。

「五拾八番！！」そう言つてノツチがほうつて現われたのは、やけに手の長い毛むくじやらの二本足恐竜。その手を地面に突き刺した。とたんに体を襲う大地の揺れ。局地的なその地震。経遠、ハナはその場にうずくまり、古びた社は、がらがらと倒壊した。

逃げ去ろうとする、鎖蛇畏、邪耶、ノツチ、フトイらに、ハナはほうつた。

「八拾参番！！」

現われた金色の怪猫が、すばやく敵ふところまで駆けて行き、緑色の毒の霧を体から噴出した。一瞬で霧に包まれた敵、四人。金猫は玉に戻りハナの手の中に飛んで戻ってきた。

そして「逃がすかぁ」とハナは飛び出した。その時には揺れは収まっていた。

が、霧から姿を現したフトヤがほうつた。

「七拾番！！」

現われたのは、この世の者ならぬ姿の童部。狩衣姿。天に手をかざすと、玉に戻りフトイの手に戻った。末尾拾は、天。

とたんに、経遠、ハナの足元に、白煙たなびかせ落下してきた小さなもの。目をやれば地面に穴を穿っている。そして、それが次々と。頭上を見るまでもなくわかった。六拾番は隕石雨。ふりそそぐ流星群。

白煙たなびかせ次々飛来しては、地面に穴を穿つ小粒の隕石の雨のなかで、ハナが叫んだ。

「うはあ。これはたまらん。話には聞いていたが。ミニ九拾番じゃないか。貴様の八拾九番は、まだ使えんのか??」

「いや。やつときた。委^{まか}せろ」

経遠はほうった。

「八拾九番!!」

現われたのは灰色の妖孤。その身体は無秩序に実体化とガス化を繰り返している。たとえば顔半分がガスになったかと思えば固まり、次の瞬間には左足がガスになっている、と言った具合に。

妖孤が、くると、と宙を一回転して姿を消した。

とたんに止まった、隕石の雨。見あげれば、八拾九番が作った無重力空間に、全て捉えられている。

ハナが、ほっ、と息をつき、「今のうちに逃げよう」と言った。その無重力空間の持続時間はまちまち。消え去れば、それらは落ちてくる。

すでに、敵の姿はどこにもなかった。

足早に、その場を離れながら、ハナが言った。

「上々で、あつたな。技玉は奪えなかったが、二人も殺した。族首^{うからあびと}の手のものを」

が、すぐに、しゅん、となった。どうしたのかと思っていると、

「女房のわたしがこんなに活躍しては、種遠に申し訳ないではないか……」と言った。

鍛人（かぬち）こと、小祇健迅

川崎文太刑事は気にかかっていた。それら一連の重大事件が、彼の管轄外での事件。彼に手を出すことはできない。

しかし、その前に起こっていた事件。サクラ町駅前で、六人の男が殺された事件。そして、七姫駅裏の駐車場で、十人の男が殺された事件は彼の管轄内だった。

その時、彼は予感がして、すぐさま、殺された男の身元を調べに役所を訪れた。

結果は、彼の思ったとおりだった。

偽造戸籍。

——存在しないはずの人間が歩き回り、殺しあっている。こいつらはどこから現われた？

が、すぐに上から、この事件は調べるなど言われた。

そして今思う。右翼団体襲撃事件。そこに転がっていた死体も、そうなのでは？

そして。

昨日、北都京都心部の神社の境内で発見されたふたつの死体も……。

導き出される答えは、ひとつ。

——この国に何かがいやがる。でかい奴が。

が、飛び込んできた同僚により、思考は中断された。彼は言った。「おい、ニュース見たか?? 大事件だ。共和党、国会議員津崎登刺殺された」

目をみはったが、速報はそれで終わらなかった。

その日、四人の政治家が暗殺された。

実行犯二十名は、すでに北都京から逃がした。しばらくの間、祖^{おや}元に身を潜ませる。が、すでにうからの里は存在しない。彼らが向かったのは、新しい里である。

昨日、タレジがやってきて、里が、敵に襲撃されたことを告げた。が、ハレゾは言ったとおり備えていた。敵が襲撃する寸前、用意していた廃村に移り住んだ。敵が踏み込んだときは、もぬけのからにしてやっていた。

そして、今日、暗殺指令。箭内を討ちもらしたが、上々の首尾。が、今回倒したのは、敵のなかでも表にいる人間。裏の人間といくら殺しあっても、それが、表ざたになることはない。捜査はもみ消される。が、表にいる顔を消したら、それは奴らでも止められない。捜査が始まる。

実行犯二十名は、都内に潜伏していたが、このアジトにも出入りしていた。ここもひきはらったほうが良い。

彼は、種遠に新しいアジトを用意させた。

七姫製菓営業社員、小祇健迅は、ようやく探し当てた、その倉庫様の建物の前に立った。シャッターが閉まっただけで、見た感じは、つぶれたガレージシヨップ。

そこを探りあてた理論的思考回路は、問屋の不正伝票を見つけたときと同じ。

――勘だ。

――不正伝票って奴は、ぶんぶん臭うんだよな。

ここも臭ってやがるぜ、とつぶやいて、にやつと笑った。

時計を見れば、午前二時。シャッターの向こうに明かりはない。

――遅い時間の迷惑な訪問者が、来てやったぜ。起きてるか？ 寝

てるのか？ それとも、オールナイトニッポンでも聴いてやがるのか？ 何をしてても結果は同じだ。今日が貴様の最後だ。経遠。

これから始まることに心を躍らせつつ、鞆の中から古式鉈を取り出した。そして気づいた。

——しまった——。

鞆に海星堂の伝票を入れたままだった。取引先の伝票をもし紛失などしたら、サルが怪獣に変身する。これから始まる戦いは、焰あり、電撃あり、なんでもあり、直撃を許せばちっばけな書類など簡単に失われてしまう。

——まずいな。こいつを死守しながら、奴と渡り合えるのか。

とはいえ、道端に隠しておくわけにもいかない。鞆をしつかり握り、屋内へ身を滑り込ませた。

なかは、暗かった。どこから、ほのかに明かりが漏れている。

——けっこう、広い、じゃねえか。

なかを見回していると、人影が現われた。手には日本刀がある。無言でそこに立っている。もれる明かりに浮かんでいる姿は、淡い金色の髪、ロッカーの少年がよく着ているモッズコート。

——間違いない。経遠だ。

「よう」彼は声をかけた。

「逢いたかったぜ」

相手は無言。

「お前、経遠だろ？ 他の奴はどこなんだ？」

相手は静かに口を開いた。

「貴様は？」

「俺は、鍛人^{かめち}だ」

「鍛人……。聞いている。八拾八番と八拾番だな……」

「そうか。有名人なんだな。俺は」

「フツが言っていた変わり者とは貴様か？」

言われて彼は失笑した。

「俺が変わり者だって?? フツがそう言ったのか?? 俺に言わ

せりや、俺が一番まともだ。知ってるか?? 俺は、真面目なんだぜえ」

——そうとも。俺は真面目な社会人。そこら辺の人殺し連中とは違う。

「よくわからんな。貴様は……。その恰好は、普通のサラリーマンに見える……」

「けっ。サラリーマンにあこがれてなにが悪い。若いくせに夢のねえ野郎だな」

経遠は、ふっ、と笑った。

「なるほど……」

「さあ、とつとはじめようぜ。殺し合いを。が、その前にちょっと待て。他の奴はどうした?? お前一人なのか??」

「いない。俺だけだ……」

「そうか。そりやあ、残念だが、まあ、相手にとって不足はない。

経遠。貴様もつくづく運のない野郎だな。俺に会うとは。今日が貴様の最後だ」

言うやいなや、健迅は闇のなかに身を隠した。ふっふっふっ、闇のなかでほくそ笑んだ。

——経遠の野郎、見失ってやがる。

身を躍らせて、一気に飛び出し、鉈をふりおろした。経遠は間一髪でかわした。

そして、応じる経遠。数合渡り合った。

経遠がふるう妖刀の、寸隙縫ってふところに飛び込んだのは、鉈を躍らせた。経遠が堪えきれず退いた。

「貴様は何者だ……」と驚き、言った。

「そんな得物で、これだけ渡り合えるとは……」

「ふん」とはなで晒ってやった。

「貴様は、時代劇の見過ぎだつ。死ねっ」

ふたたび躍りかかった。経遠に叩き込むべく、身を翻して鉈をふるった。手にはしっかり鉈を握っている。

さつ、と跳び退った経遠が、技玉をほうった。

「七拾四番！！」

現われるものを、目にするまでもなく知っていた彼は、とっさに建物の隅まで逃れた。水の鞭が空を切った。

——ひゅう、危ねえ、危ねえ。水の鞭はともかく、あれに飲み込まれたら骨がバラバラになっちまう。

が、飛沫しぶきが鞆にかかっていた。

——まずい。伝票が濡れたか！？

——くそつ。奴が使うなら、俺も使ってやろうじゃないか。

彼は自分の玉をほうった。

「八拾八番！！」

現われた妖魔は子牛くらい。蟬の幼虫に似ている。その背中にふじつば様のものがある。妖魔が後ろ足を突っ張り、そのふじつばで経遠を狙った。

「いけえ」

飛び出した火山弾が経遠を襲う。が、経遠が、一瞬早く跳び退り、火山弾は、建物の壁に大穴を開けただけだった。

その穴に身を躍らせて、経遠の姿が消えた。

——おい！？ まさか、逃げたのか？？

「こらあつ。経遠おつ。戻って来いっ！！」

彼は叫んだが、返事はない。

「ずるいじゃないかつ、経遠っ！！」

が、長居はできない。ここは幹線道路沿いとはいえ、周辺は住宅街。今の物音はでかすぎる。

健迅は、ぶつぶつ言いながら、鉈をしまい、倉庫をあとにした。時計を見た。

——もう、歌うヘッドライトが始まる時間だつ。——まいった。三時間しか眠れないじゃないかつ。

アジト移す／また来る

新しいアジトの住所は、そこで間違いなかった。何度も、種遠にもらったメモと見比べてみたが、そこだった。

うらぶれた街中の雑居ビルの二階。

で、中に入ると、仲間がいたので、やはり間違っではないなかった。種も、武も、ハナも、カヤも、だけでなく、三毛門に、タレジに、禅僧の野白までいた。がらんだうのなにもない空間に、車座になって、フロアのうえに座っていた。

「ここは……??」あつけにとられて聞くと、種遠が若干申し訳ない顔をして答えた。

「急なことにて、ここしかなかったのだ」

確かに、壁の一面は、総鏡張り。その壁には、そのためのバーもついている。通りに面した窓ガラスには、『ダ』『ン』『ス』『教』『室』の五文字、そして、『ボ』『ン』『ジ』『ユ』『ー』『ー』『ル』の六文字が、逆さまになって張り付いている。

「ここは……、目立つではないか……」

種遠は、肩をすくめ、

「大丈夫であろう」と言った。

「勘違いして客が来ればどうする??」

「窓ガラスの文字を剥がせば大丈夫に決まっておる」

「外から丸見えではないか」

「暗幕のカーテンが備え付けとなっておる」

「どうやって寝るのだ??」

「奥にも、ふたつ部屋がある」

「それより名が『ボンジュール』とは、いったいなにダンスを教えていたのだ??」

「それは知りようがないことだ」

カヤが口をはさんだ。

「兄上。カヤは、気に入りましたよ」

「お前が気に入ったのは、大きな鏡があるからだろう」
カヤはむすっとした。

タレジが言った。

「いいところじゃないか。そのうち、俺が借りて、ここで開業医をやってもいい」

「貴様は免許がないじゃないか」

最後にハナが言った。

「男のくせにごちゃごちゃ抜かすな」

その男がそこを訪れたのはまったくの偶然――。

ノックの音に、カヤは立ちあがった。今は、彼女一人きりだった。全員、必要品を買出しに行っている。

扉を開けると、どこかで見たことのある男がいた。

男は名刺を出しながら、

「わたしは、七姫スポーツの記者である」と言った。

そのヘンテコな言い回しに、記憶がよみがえり、思わずどきりとなった。

――この男は何者である、か??

――なぜ、こうも、行く先々に現われる??

――まさか、正体を知っておるのでは??

が、それは杞憂に過ぎなかった。男は言った。

「先日の事件についてである」。なにか目撃しておられたら、ぜひとも、お話伺いたいのである。特に、龍だけでなく宇宙人などゝわたしは好き」

「お話しすることはありません」そう言って、扉を閉ざした。

「取材拒否とはけしきりからんのである」と男は扉を叩いたが、

しばらくすると、口笛を吹きながら帰って行った。

カヤは扉の横で、息を潜めて様子をうかがっていた。

——なんとも奇怪な。おのれが宇宙人ではないのか???

カヤ、ほとほと参る（前書き）

掲載時刻変更のお知らせ——φ（．．）

どらぎ、毎日、読んでくださいます、ありがとうございます
勝手ながら、都合により、掲載時刻を変更させていただきます

来週より、

平日、午後四時頃～五時頃～

土日、午後十時頃～十一時頃～、となります

ご迷惑をおかけして申し訳ありません

今後とも、よろしくお願いいたします——φ（．．）

カヤ、ほとほと参る

カヤは、自身の境涯を、不幸なこととは思っていない。けれど、時折、そのことに思い及ぶ。たとえば、今日みたいに、下校途中の女子学生の集団に出会ったとき。

すれ違いながら、思う。

——かわいい制服である。

——わたしや、沙穂が、あれを着れば、どんな風に見えるのでしょうか。

とはいえ、叶わぬ思いであることは、わかりすぎるほど、理解している。

が、彼女は少し寄り道をすることにした。そのくらいは許されると思い。

甘味処。

なかに入ると、そこは制服姿の女学生でいっぱいだった。

相席になりますけど、良いですか、と言って、店員は案内した。

案内された席にいたのは、兄と同じように髪を染めた、若い男性だった。整った顔立ちで、清潔感ある身なり。が、場所が場所である。

——おのこ（男）のくせにこのような場所へ……。

と、思ったが、当人はまったく気にしている風はない。会釈をして腰かけた。

蜜豆を注文し、待っている間、見るつもりはまったくなかったのだが、どうしても、目に入った。

白玉ぜんざいのお椀と格闘しているその男は、箸の使い方が、まったくへたくそだった。

丸い餅が、箸から滑り落ち、テーブルの上に転がった。それを何度も箸で突き刺すが、勿論、そんなことで餅はつかまらない。男はあきらめたように箸を離し、白い餅を指でつまんで口に運んだ。

——はしたない男である。

相手が彼女の視線に気づき、照れたように笑った。彼女は、慌てて視線をそらした。

が、次の餅は、テーブルの上からも滑り落ち、床に落ちた。男はあたりを見回すと、平然とそれを拾いあげ、お冷でゆすいで、口に運んだ。

これには魂消て、思わず言ってしまった。

「な、なんと行儀の悪い……」

すると男は、咎められたことに気づき、にっこり笑って、こう言った。

「食べ物を、落とすこと、悪いこと、です。でも、食べ物を、粗末にすること、もっと悪い、です」

その片言の日本語に、さらに驚き、

「外つ国とくにの人であられたか……」 思わずお国言葉が出た。どう見ても、日本人にしか見えなかったから。

すると相手の男は、目をみはり、

「美しい、日本の古い言葉、話す人に、会えました」と喜んだ。

「わたしは、日系三世です。ハワイから来ました。祖父が、ハワイ移民、なのです。わたしの名前は、圭人です。二十一歳、です」と聞かれもしないのに、べらべらとしゃべった。

なんと、おしゃべりな男である、と少しあきれた。

「ケイト、とは、おみな（女）の名では……？」と聞くと、相手は、

「おお、おみなとは、また美しい日本語、です。わたしの名前は漢字で、圭人と書きます。圭は、玉を意味する漢字です。あなたの、名前は、なんですか？」とにこにこ笑って聞いてきた。

「カヤ、です……」 勢いに気圧されて思わず答えた。

「カヤ、美しい名前です。わたしは、日本の古いもの、大好きです。古い言葉、和歌、文学、器、書画。わたしは、日本の、古いものを作る人、になりたい、思っ、て、日本に来ました。ヤキモノ、したいのです」

男のくせに

——男のくせに、ほんとにおしゃべりな奴である。

あきれていると、にこにこしながら、相手は言った。

「カヤと、友達、なりたいです。友達、なつて、くれますか？」

その言葉に、慌てて言った。

「わたしは、このところ忙しいので……。とても、友達には……」

すると相手は、まったく気にする風はなく聞いた。

「カヤの、忙しいは、いつ、終わりますか？ 三ヶ月？ 一年？」

「いえ、いつ終わるか、全然……」言葉を濁そうとすると、

「十年くらい、待つは、平気です」と言ったので、目が点になってしまった。

が、相手はさらに驚くべきことを口にした。

「やっと、会えました。ずっと、夢でした。日本の美しい女性と、知り合い、結婚する……」

——ぶつ魂消る、とはこのことです——。

——こいつは、いろんな意味で、危険な奴です——。

が、ぶつ魂消ている場合ではない。こんな奴とかかわってはいけけない。

彼女は冷たくこう言った。

「わたしは十六歳です。二十一歳のくせに、十六歳の女の子をめとるうなどとすれば……、あなたは、ロリコン、と呼ばれ蔑まれることになるでしょう」

すると、相手は目をぱちくりして、不思議そうな顔をした。

通じなかったか、と思っていると、恬然と言つてのけた。

「かわいいものの好きの、なにがいけけないのでしょうか？」

——本物だ——。

——確信犯だ——。

——こやつはこうして犯行を重ねているに違いない——。

「さては、ナンパ目的で、このような場所に出入りしてるのですね？」と、睨むと、相手は慌てて手をふった。

「違います。この店、来るは初めてです。それに、カヤは、かわいい

い思います。だから友達になりたい思いました。けれど、他の女の子、かわいい思いません」

——ふん、口では何とでも言えましょう。

そう、思つて席を立ち背を向けた。が、相手はついて来た。

「ここで会つたが百年目、思いました」と言いながら。

会計で、なんとか、ふりきつた。

「カヤ、待つてください」と、財布を手に、慌てふためくその男を残し、あとは足早に立ち去つた。

三日後——。

——また会つとは、思つてもいませんでした——。

カヤは身体を凍りつかせた。信じられないものを見た思いで。

が、冷静に考えてみれば、不思議なことでもなんでもなく、待ち伏せされていたことは明らかだった。

例の甘味処の前。

主人は、カヤを見つけると、にっこり笑つて手をふつた。

——無視するべきです。——こやつが危険な男であることは知れております。

彼女は、手の買い物袋握り締めると、足早にそこを通り過ぎた。

今後は、買い物係はハナに代わつて貰いましょう。と、思いながら。

「カヤ。良かった。また、会えました」と、主人はにこにこしながらついて来た。

そして、足早に歩く彼女に追いつがり、あれから、どんなに会いたかつたか、どんなに想つていたか、臆面もなく言つてのけた。

さらに。

「カヤを想つて、和歌を詠みました。聞いてください。汝^{なれ}想ふ——、あ、待つてください」

真つ赤になつて走り去る彼女に追いつがり、自分の創つた短歌を

詠んで聞かせようとした。

が、そんなもの死んだって聞くのはいやである。全速力で駆け去った。

——ほんとにヘンテコリンな奴である。

その場から逃げ去り、五分ほど経ったところである。大通りを避け、^{ひつけ}人氣ない高架線沿いを歩いていた。

背後から来た二人の男にいきなり襲われた。つかまれた肩をすばやくふり払い、高架線下の寂れた公園に逃れた。

身に佩びているものは二本のナイフのみ。敵は妖魔を使うのかどうか、わからない。彼女が技玉を佩びていない以上、感知して襲ってきたわけではないはず。

小さな公園の中央で、買い物袋を捨て、二本のナイフを抜いた。

「名乗れ！！」鋭く言った。が、

「名乗る必要はない」

「とっ捕まえりや大手柄だ」口々に言っつつかみかかってきた。それで、三下だと、知れた。

——認識が、甘い。

彼女は男二人の手をすばやくすり抜け、二本のナイフを鋭く躍らせた。二人の男は、咽喉を切り裂かれ、その場に倒れた。認識を改めただろうが、すでに手遅れだ。

ふっ、と息をつき、頬にかかった血をぬぐおうとしたその時。

「カヤ、それは、いけないこと、です」聞き覚えのある声がした。ふり返ると、公園の入り口に、主人が立っていた。

——見られた！！ この男を、殺さなければ——。

「来るなっ。行け。そして、警察に告げたければ、告げるがいい」
「警察に言うこと、しません。けれど、」

主人はそばまで来ると、カヤの手のナイフに、自分の手を重ねた。
「女の子が、することは、いけないことです」

「知った風なことを言うな。殺さなければ、殺されるのだ」

「もう、わかります。カヤが普通の女の子でないこと、もう、わかりました」

にっこり笑って言った。

「わたしでは、カヤを守れませんか？」

——なにを言っている！？ この男は、馬鹿か——！？

「できるわけがない。見ていたのならわかるだろう。普通の相手じゃない。今は雑魚だ。もっと強い奴がたくさんいる。お前など、簡単に殺されてしまう」

「殺されてしまう？ おお、それです」

主人は、にこつと笑った。

「死なば精霊となりて汝をなれ護れましょう」

死んで精霊となったなら、きっとあなたを護れるでしょう。

どこがずれてるのか判らないが、ぜったいずれてるその言葉が、心のどこかの琴線に触れた。思いがけず、目がうるんでしまった。

——調子の狂う奴である。

と、呆れるしかなかった。

武を、九拾九番搜索にまわした

新しいアジトへ移って、数日索敵を中断した。その間に、経遠さくていきには確認すべきことがあった。

そして、昨日確認できた。武遠を呼び出した。ダンス教室の奥にある事務所様の小部屋。

入って来た武に、こう切り出した。

「昨日、誰と会っていた？」

武の顔が一瞬でこわばった。

彼は告げた。

「九拾九番搜索に回ってもらう」

「なっ！！」武は、目をむいた。

武が言葉を継ぐ前に、言った。

「貴様は守れるつもりでいるのだろうか、甘い。たとえ守りきれたとしても、貴様が死ねばどうだ。種が死んでも、ハナは悲しまない。逆もそうだ。俺が死んでも、カヤは悲しまない。俺が死んでも、悲しむ人間はいない。が、貴様はもう違う」

「貴様が死ねば沙穂が悲しむだろう」

「悲しむかもしれない。が、理解できる。ずっと、それを承知のうえで育ったからだ。が、普通の人間は違う。判れ」

武は黙りこんだ。が、納得した風ではない。最後は命令した。

「三毛門らを率い、九拾九番搜索を指揮してくれ」

武遠が出て行ったあと、彼はため息をついた。

——もう一人、……。

ハナが怒鳴り込んできた。

「武を九拾九番搜索にまわし、カヤを祖元おやもとへ帰すだど！？ 貴様、

何を考えておる。負けるつもりかっ!？」

「祖元へ帰すのではない。祖元警護にまわすのだ」

「同じことだつ。別れさせろつ。もう、逢わすなつ。それで済む話だつ」

彼は束の間押し黙り、それから言った。

「それができるなら、二人ともそうしてたはずだ。それくらい二人ともわかつている。それができない相手なら、仕方ない……」

ハナはむすつとして、言った。

「そんなことで、次々外していたらきりがない……」

それから、いつものように、彼の頭をくしゃくしゃとつかみ、言った。

「貴様、いま少し、残忍な龍らしく、せい。口先だけではないか……」

乃那駕（ノナガ）県、人里はなれた山中の廃村――。

カヤは、久しぶりに沙穂と会った。

「これはまた、ぼろぼろな家である……」

「もとは廃村でしたゆえ、仕方ありません……」

それよりも、と沙穂はにっこり笑って言葉を継いだ。

「カヤによい人ができた、と聞きました……」

「う……」カヤは口ごもってしまった。

――あれを以って、よい人と呼べるのだろうか……。

「どのような方なのですか……?」

ますますもって説明できない。

「はじめてあつた時、」

気が進まないまま、口を開くと、沙穂はにこにこして、耳を傾けている。

「そやつは拾い食いをしていた……」

「まあ……」沙穂は手を口にあてて驚いた。

説明するのではなかった……、と、暗い気持ちになった。

「おいくつの方なのですか……？」

「二十一……」

そうなのだ。しかも二十一のくせに、少女を妻にめとろうとたくらんでおる。そう言語変換してみれば、まことにもって、とんでもない奴である。

彼女も自分の眼力に自信がもてない。いっそ、沙穂が否定してくれば、と思い話した。

が、沙穂は首をかしげて、こう言った。

「確かに、その方の仰るとおり、かわいいものを好きで、なんの悪いことがあるのでしょうか……？」

——考えてみれば、この二人は似ているではないか——、と気づいた。

必然的に、こう、思った。——厄介なものに取り憑かれたのかも知れぬ……。

索敵開始／野槌、把式、鎖蛇畏、邪耶、陽菟衣

索敵を再開した。

北都京、都心――。

種遠は、一人ベンチに座っていた。

繁華街のど真ん中にあるその公園は、遅い時間であってもちらほら人影が見受けられる。アベックや、定まらない足取りで通り過ぎる酔客の姿もある。

種遠は、そこでずっと待っていた。待ち始めて三時間になる。ふと、その顔をあげた。

「ようやく、釣れた、か――」

玉の気配を感じた。六ヶ。取り囲むように近づいてきている。

種遠は、立ち上がり、静かにその場を離れた。公園の中の階段をおり、地下街へ向かう。

その扉はあらかじめ開けておいた。警備員も、すでに倒している。

真っ暗な地下街をまっすぐ進み、四つの街路が交差する、噴水のある広場で足を止めた。

そして、そこで待つこと数分。

暗闇のなかに現われたのは、妖怪女ノツチ、きんぴかの悪趣味男把式、黒服の鎖蛇畏^{サタイ}、二人の少年、邪耶^{ヤヤ}と、ヲトイ（陽菟衣）。

一人と五人で向き合った。

「これは、驚きだ……。八拾参番を喰らって、もう動けるとは」
種遠が言くと、ノツチがあざ笑った。

「ふん、敵の妖魔の毒くらい、調べつくしておるわ。解毒剤をたんと用意してある。貴様らにはなかるうが、の。帰ったら女房に伝えておけ」

ふつ、と種遠は晒った。

「帰してもらえるのか？」

「ぐぬ……。失言であつた。貴様、帰れると思うなよ」

間抜けな女だ、と、種遠は晒い、

「帰れぬのは、貴様らだ」と伝えた。

その時、闇闇のなから姿を現したのは、黒駸くろびち、鶴駸つるびち、羚太りょうた、大貉かく、孤生こき、燕様えんようら、十名の黄牙竜の兵。全員、今風の若者を装っているが、その背のギターバッグには、それぞれの妖刀。

「謀たばかったか！！」とノツチ。

「釣られたほうが、悪かろう」と種遠。

悪趣味男、把式が晒った。

「ふん。玉を佩びずに潜ませていたか。黄牙竜は、奇襲好きだな」

「そうか。貴様も感知できるのだな……。まあ、どうでもいいことである……」

十名の兵が妖刀を抜いた。種遠も抜き、ギターケースを投げ捨てた。

「さあ、やるのか……？ それとも、やられるのか……？」

鎖蛇畏がとび退つて、退き、鎖蛇くさりへびを放った。

「六拾五番！！」

闇闇の地下街に出現したそれが、床のタイルをコンクリごと抉りながらのたうち、黄牙竜の兵に牙をむいた。が、三名が転がって避け、その時には、黒駸、大貉、孤生、燕様ら、四名が鎖蛇畏を刃にかけていた。闇のなかに転がった鎖蛇畏の屍。

「六拾八番！！」

続いて現われた見あげるように巨大な泥蛭が、汚い泥を吐きかけたが、これも、ものともせず、羚太、大貉、鶴駸ら、三名が取り囲み、ナイフをふるう邪耶を、やすやすとうち倒した。

この間、わずか一分あまり。

たまらずノツチが叫んだ。

「待てっ、伝言じゃ、伝言がある」

種遠は兵を止めた。

すでに把弍は姿を消していて、ヲトイ、ノツチの二人を取り囲む
十人と種遠。

「聞こう。なんの伝言がある？」

ノツチは言った。

「フツからの伝言じゃ。雌雄を決しようと。場所は――」

小祇健迅、経遠に襲われる

フツより伝えられた約束の日の前日――。

カヤが、沙穂、竜太郎をともなつて、ダンス教室を訪れた。

ハナは飛び上がって喜び、久しぶりに会う我が子にほお擦りした。経遠は、種遠親子にホテルを取ってやった。久しぶりの、親子水入らずの夜を過ごせば良い、と思った。

竜太郎の手を引いて、ダンス教室に入ってきたとき、沙穂は、どうやら怖気づいていた様子だった。彼がびっくりして立ち上がると、カヤの背中に隠れた。

それから怯えた顔をして、彼の顔をのぞきこんだ。叱られると思っていたらしい。

彼がやさしい顔をしてみせると、ようやく安心した様子になった。明日の戦いには、武遠、カヤの戦力も正直欲しいところだった。

が、武遠は三毛門と二人で、九拾九番搜索のため、奥州の山奥へ入り、三日前から連絡が取れていない。

カヤも、こうなつては、ここで留守を守ってもらつ。

が、この三名以外は、全員作戦参加する。総勢三十余名。玉の使い手以外も、全員。

その夜、彼は、沙穂や、仲間を残し、一人出かけた。ある男を始末するために。

その男を見つけたのは、まったくの偶然だった。スーパーで日用品を買っていたとき、その男の技玉を感じた。

驚いたが、納得できた。あとをつけ、勤め先を突き止めた。

その夜、遅く。

小祇健迅は、真つ暗な自社工場の片隅で、明日問屋に持っていくサンプル商品を選んでいた。

まったく、とぼやきながら。

――売れえつ、売れえつ、と怒鳴りやあ、売れると思ってやがる。

――そのくせ、値引きしたらまた怒鳴りやがる。

――来る日も、来る日も、同じせんべい持って顔出して、値引き意外にする話があるなら教えてくれ、ってんだ。

旅問屋、というものがある。

その名の通り、お菓子を背負って、日本全国売り歩く問屋である。古いスタイルの問屋だが、今でも残っている。

七姫製菓がここまで大きくなったのは、その旅問屋に負うところが大きい。七姫市地場中小企業ながら、今では日本全国に製品が流通している。旅問屋が売り歩いてくれたからである。

が、確かに任せておけば勝手にどんどん売ってくれるが、値引きも大きい。容認できないくらい。

その値引き額が、今も根強く残っていて、価格交渉を難航させる。今日も激昂するサルに怒鳴られた。

――たった五拾銭^{せん}安かっただけじゃねえか。五拾銭だぜ、五拾銭。そんな金、流通してねえだろおが。

少しでも、話の種になりそうな商品を選んで、箱に放り込んでいく。

問屋によく言われる。

『年がら年中、同じせんべい、持ってこないでよ』

――腹が立つけど、『同じせんべい』、しかねえんだよ。うちは。まったく、むかつきやがるぜ、と背伸びしたとき、その影に気づいた。誰もいない工場の薄い暗がりにはいたのは、淡い金色の髪の毛、オリーブ色のコートの若者。

――つ、経遠！？ まさか！？ こつ、この野郎お――！！

健迅は慌てふためき身構えた。

「職場に押しかけるなんて、ルール違反じゃねえかつ――！」

経遠は静かに口を開いた。

「貴様はなぜ働いている？」

「ちい。悪いかよっ！！　これが趣味なんだっ！！　そんなに不思議かっ？？　夢のない野郎だぜっ」

経遠はにやつと笑い言った。

「……わからないでもない」

「けっ。わかられちゃうと、かえってけったくそ悪いぜ。殺しに来たか。返り討ちにしてやる」

「明日……」と、経遠はナイフを抜いた。

「明日、貴様に居てもらっては困る。死んでもらう」

健迅は勿論、明日の話は、聞いていた。来るな、と言われている。

——この様子じゃ、まったく気づいてないな。どうする？　教えてやるか……。

何を考えているんだ、俺は！？　と、はつとする。こいつと真剣勝負がしたければ、今、ここで、すればいい。

とはいえ、獲物が無い。鉈の入った鞆は事務所だった。近くにあったスパナを手にとった。

——決着をつけてやる。

睨みあった。薄暗い工場内。せんべいを焼く機械が、何台も連なっている。日中は騒然とする空間が、音もなく静まり返っている。

物音ひとつ立てずに、経遠がその身を躍らせた。一気に間合いを詰め、二本のナイフを繰り出す。鼻先を、光るそれが何度にもかすめる。ひるがえったスーツをかすめて、その布を裂く。

かわしながら、スパナを叩き込む。

——この野郎、なんて速さだ。妖刀だけじゃなく、ナイフもこれだけ使えるとは、驚きだぜ。

こらえきれずに、距離をとった。とび退り、せんべいを焼く機械のうえにとび乗った。

上から身を躍らせようとした瞬間、

「七拾四番！！」経遠が水坊主を放った。

—— なっ、なんてことしゃがるんだ——！！

愚痴りながら、機械の裏側へと、転がって避けた。

機械の心臓部は、逆巻く水の塊りに包まれ、バラバラになった。しかも、水の塊りは、機械を破壊すると同時に、彼に水の鞭を放っていた。

間一髪、かわした。

連なる機械の裏側を、這って逃げながら、愚痴った。

—— どうしてくれるんだ。一台、いくらか、知ってるのか。

—— 畜生。今日、俺は、残業してなかったことにしよう。知らぬ、存ぜぬ、で、すつとぼけるしかねえ。

その時、ようやくポケットの技玉が脈動した。

—— 待ってたぜ。

蝉の妖魔、八拾八番は、ずっと脈動していた。今、脈動したのは、もうひとつの方。

「八拾番——！」高らかに晒い、叫んだ。

狼の妖魔が、現れ、彼に向かって一声咆えた。その瞬間、淡い光を帯びる、彼の身体。

「ふっふっふっ」

ほくそ笑んだ。その光は、彼の身体を、刃物からも、焰からも、守る。それが守ってくれる時間は、ほんのわずかだが、彼にとっては充分な、時間。

「経遠おっ。覚悟しやがれっ——！」

機械の陰から、躍り出た。

が、すでに、経遠の姿はどこにもなかった。

—— まさか！？ また、逃げたのか——！？

「ずるいじゃないか、経遠——！ 正々堂々勝負しやがれっ——！」

カートゥーンランド建設予定地の奸計／九拾番落下

その日――。

経遠、種、ハナを筆頭とする、黄牙竜三十余名が姿を現したのは、寒風吹きすさぶ、人工島、埋立地、後の臨海商業地区、その敷地のほぼ半分を占める、カートゥーンランド建設予定地。

基礎工事だけの、なにもない大地がどこまでも広がっている。その向こうに見えるのは、寒々とした海。その暗い色。

曇天頭上を黒々と蔽い、身を切る風のなかには、小さな雪の粒が舞い飛ぶ。

全員、黒い鎖帷子に身を包み、経遠のそれは、人型に影が歪むそれ。

全員、妖刀、技玉を佩び、手にはからくり箆手。そして待ち受けていた彼らを、どこからともなく現われた、一隊が襲った。日本刀で武装しているが、

「なんだ！？ こいつらは？？ 三下ではないか」ハナが吐きすてた。

ハナが言ったとおり、だった。

そこには恐れていた鍛人どころか、一切の玉の使い手の姿がなかった。

妖刀双蛇牙をふるいながら、経遠は、頭巾のなかで、種遠と話した。

「これは、肩透かしを喰らったか？？」

「わからぬが、とにかく片付けよう」

それぞれの頭巾の中を行き交う、三十余名の怒号、気合の声。三下の兵など、ものともせず蹴散らしてゆく、剣戟の音。

その時、白煙たなびかせ頭上から落下してきた小さな欠片。それが次々と飛来した。黒駁、燕様が、それぞれ、頭と、胸を打ちぬか

れ、その場に転がった。

「ヲトイ（陽兔衣）の七拾番だっ！！」

敵味方関係なく襲い掛かるその攻撃。当のヲトイの姿を捜すがどこにもない。

「踏みとどまれっ。術者を捜せ」

無数にふりそぐ、白煙のなか、下したその判断は間違っていた。正々堂々、干戈を交える気のない、敵の奸計に、この時点で、彼は気づくべきだったのである。

勇敢に剣をふるう一隊を、晒いながら見おろしていたのは、フツ。その場に姿を現した。巨大なクレーン車の屋根の上に。

その姿に気づいた経遠が、まっさきに駆け寄ろうとしたら、ためらうことなくフツはほうった。

「九拾番。喰らえ。天降り（あもり）だ」

経遠が、愕然としたときには、すでに天女が現われていた。その姿は、たおやかな羽衣が背で羽のように風になびき、手には珠で飾った瓊矛ぬぼこを持っている。

が、笑みを浮かべている瞳の裏には、獰猛な光が潜んでいる。

そして小さな光を蹴り上げると、フツの手に戻った。瞬時に、身を翻し姿を消したフツ。

そして、天空を昇って行くその光。その正体は、彼ら全員知っている。直径一メートルほどの、燃えさかる水素の塊り。小さな太陽「九拾番だっ！！ 退けっ」

慄然とし、凍りついた戦場。三下の兵らはその正体を知らず、この時とばかり、彼らに襲い掛かった。それを退け、いつせいに海を目指して駆けだした黄牙竜の兵ら。

——あれを防ぐには、俺の八拾九番しかない。が、それで捉えたとしても、わずかな時間。

天空で、眩い光源に姿を変えたそれを睨み、経遠は思った。

——早く、脈動しろ……。

その気持ちにこたえるかのように、激しく脈動起こしたふところ

の妖魔。

——遅いんだ、じゃじゃ馬め。

すでに落下を始めたそれは、凄まじい勢いで彼らに迫っている。

「八拾九番!!」

現われた狐の妖魔が、寸でのところで、燃えさかる塊りを止めた。空中にとどまった、その塊り。炎噴き上げ、地に落ちるときを、今か今かと待っている。

「退避っ!! 海に飛び込めっ」

生じたこの隙に、死に物狂いで足を飛ばし、次々と海に飛び込む黄牙竜の兵ら。経遠、ハナ、種遠も海に飛び込んだ。

その瞬間、落下した。

とたんに、人工島のほぼ全てを蔽った、紅蓮の爆発。埋立地をなめ尽くし、巨大な火柱へと集束していった。

その衝撃は、海中まで激しくふるわせた。襲い掛かる強い潮に飲み込まれる彼ら。沖まで引っぱられていく者も。

漸う、波間に頭を突き出し、水を吸って重くなった鎖帷子を持ち上げ、人工島に這いあがれば、そこには、無残な焼け跡が広がっていた。

この時、生き残っていた者は、経遠、種遠、ハナ、鶴駁、太貉、
鈴太、孤生ら、総勢二十名弱。

「フツを捜せ」

経遠の号令で、衝撃覚めやらぬ身体で懸命に駆け、捜索を開始する彼ら。

この爆発からは、術者本人も逃れられない。あらかじめ用意したシェルターに身を潜めているはずだった。

「どこかに、いるはずだ」

「くそ、どこに隠れた」と、捜し回る彼ら。

が、この時、新たな兵が現われ、彼らを取り囲んだ。

猛然と喰らいつく、太貉の毒蜥蜴、鈴太の蝦蟇、蹴散らす、鶴駁の妖馬、そして牙をむく、種遠の焰の龍。次々と現われては、群が

る兵を一蹴した。

妖魔の次は、おのれ自身の妖刀で、斬りこみ、次々と兵をうち倒した。

が、その時、経遠は気づいていた。近くにある、まったく異質な妖魔の気配に。

その気配は、種遠も気づいていたようで、不審な顔を見合わせた。そして、少し、離れた場所に立っている、男を見つけた。

一段、高い場所からこちらを見ているその男は、痩せこけていて、その顔はまるで麻薬中毒患者のよう。薄汚れたコートに身を包み、薄ら笑いを浮かべている。

そのふところに感じる妖魔は、彼の知るものとは、まったく異質のものだった……。そして、それを四つ感じた……。

まったく異質の妖魔――。

敵の手にある、四つの技玉――。

その符合がもたらした回答に、愕然とした。

九拾五番／黄牙竜壊滅

四つの異質の技玉を使う者。

その回答に、経遠の血は凍りついた。

そして、味方に叫んだ。

「敵に召喚師っ！！　すぐさま討てえ！！」

そして、自らも討つべく、群がる兵をなぎ払い、足を飛ばした。

召喚師。彼らに使えぬ九拾番代の妖魔を使役する者――。

駆けながら、敵の手にあるその四つの玉の特性を、彼は必死で思い出した。

九拾壱晩。不可視。

九拾四番。爬虫類、昆虫を統べる。

九拾五番。狂気、幻覚。

九拾七番。吸精、死者使役。伝聞でわかっているのはこれだけ。

彼らの刃が、あと少しで届こうかという時、召喚師は晒いながら、ほうつた。

「九拾壱番」

巨大な翼を持つ、禍々しい姿の犬が現われた。召喚師の姿を、完全に透明にすると、消えた。

ハナのふるった刃の切っ先が、空を斬った。

続いて聞こえた声は、「九拾五番」

そのとたん、曇天にわかに掻き消えて、暗い青空が広がった。その空は、どこまでも透明で、けれども黒ずんでいた。異界の空。奥にまたたく星は、小さく、頼りなげ。

彼は、自身が幻覚のなかに封じ込められたことを知った。

幾度も身体に突き刺さる刃を感じた。気配に向かって、必死に妖刀をふった。敵が群がっている。わかっていることは、それだけ。必死で腕をふったが、刃は全て空を斬った。

頭巾の中に仕込んだトランシーバーから、仲間たちの悲痛な声が

次々響く。叫んでいる。

「^{しりぞ}卻けるお」

「踏ん張れっ。転べば最後だっ」

「踏みとどまれえ」

必死で叫んだ。

「皆っ。頑張れっ。追ひ払えっ」

誰かが叫んだ。

「駆けるなあ。駆ければ転ぶぞっ」そして悲鳴に変わった。

そして、混乱した仲間の声。

「くそっ。何人いるんだっ」

「どこだっ！！畜生おっ」

「皆っ、頑張れっ。頑張ってくれっ」叫んだ。

そして聞こえた、種遠の名を叫ぶハナの声。

「ハナ！！無事か？？無事なのか؟؟」

返事がない。

そして。

一気に戻ってきた。曇天。目に飛び込んだ敵三人を斬り捨てた。

そして。

愕然とした。

立っているのは、種遠と、彼、二人きりだった。

ハナ、鶴駁、太貉、羚太、全員、地に倒れ伏し、その亡骸に、敵が群がり刃を突き刺していた。

正氣に戻った種遠が、自身に群がる敵を追ひ払い、さらに、ハナの遺体を貫いている敵を切り捨てて、その身体を助け起こした。

が、それは、抱きあげ、嘆き悲しむためではない。そのふところの技玉を確かめた。すでに、敵に奪われていた。

そのあと、種遠のとった行動は、経遠を逃がすため刃をふるう、こと。

駆け寄り、敵をなぎ払った。

「大丈夫か、戻ったか？」

茫然と立ち尽くす彼に言った。

「ここから逃げるぞ」そして、齒を食いしぱり、
「俺たちは負けた……」と。

路地裏から、路地裏を伝った。

街のどこに潜んでも、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

二人はずぶぬれの身体で、闇を伝い、逃れてきた。身体を何箇所も刺されていた。

鎖帷子と、妖刀は、隠してきた。が、コートに身を包んでも、ずぶぬれの身体と、血のにじんだ傷は、隠しきれない。

種遠に肩を支えられ歩いているが、彼の足はもつれる。

「すまん……。俺が、甘かった……」

「貴様の責任じゃない……」

「いや……。俺の、責任だ。みんなを失った……。ハナは、残念なことだった……」

「気にするな……」

彼は、自分が間違っていたことを思い知った。

——種遠が悲しくないわけがない。俺がこれほど悲しいのに。

名前の暗号／竜太郎改名、竜太鉦

がらんとするダンス教室で、沈鬱な顔を並べる、経遠、種遠、カヤ、沙穂。皆、無言。

経遠、種遠のふたりは、血の滲む包帯だらけの体。カヤ、沙穂は、目につつすらと涙を浮かべている。ただ、四歳の竜太郎のみが、そのあどけない顔に笑みを浮かべ、母の姿がないことを不思議がっている。

敵に、召喚師がいた。

仲間のほとんどを失った。全滅に近い。資金もすでに底をつきつつある。

パトカーのサイレンの音が、何度も表を通り過ぎる。敵は警察を動員してきた。逃げなければいけない。ここが見つかるのも時間の問題だった。

勿論のこと、経遠は、負けた場合の手も常に考えてあった。が、それは言い出せないでいた。

武遠、三毛門の二人が飛び込んできた。

「まことかつ」部屋へ入るなり、武遠は言った。

経遠は、無言でうなずいた。

武遠は肩を落とし、言葉を失った。

経遠、種遠、武遠、カヤ、三毛門、黄牙竜生き残り、この五人か、と思われたとき、医者の方と、僧侶の方が入ってきた。

タレジが口早に伝えた。

「ハレゾが里を移した。さらに山奥へ。もはや、連絡が取れん……」その報を受けて、全員が、さらに言葉を失った。勿論、全員が、そのことをもって、見捨てられたとは思わなかった。ハレゾが最優先したことは、宝剣の死守。そのことは、わかり過ぎるほどわかっている。

が、もはや逃げ帰る場所さえ失った。

経遠の決意が固まった。固く結んでいたくちびるをひらいた。

「二十二年後だ……」

全員が彼をふりむいた。

「童の姿で現われるという、その者たちと、ふたたび共に戦おう……」

…」

無言のまま耳を傾ける一同。

「ここで、別れ、それまで潜伏する……」

そして、次の言葉を言った。

「これより我等、散り散りとなりて、世の片隅に身を潜ませよう。敵の追撃をうち払い、生き延びれば良し。たとえ果てるとしても、各々の子だけは守りぬき、この玉を受け継がせる。そして、二十二年後、必ず集う。もし、それまでに我等が息絶えていたとしても、その子等が、長じて出会えば、わかるよう、名前に暗号を持たせよう」

「暗号とは……？」

種遠の言葉に、経遠はうなずき答えた。

「竜太郎は、改名してもらう。竜太^{りゅう}と^{たろう}とする。太、に、いろいろの^り。そして、めいめいも、子が生まれたら、その名に、太^{りゅう}を含ませる。妖魔継承者でなければ、太^{りゅう}路。みちの路、とする。と、路。これは、我等の遠い祖^{おや}にあやか^{みち}った名である」

「女兒は？」

武遠の言葉に、ふたたびうなずき続ける経遠。

「カタカナ三文字とし、継承者であれば、コナ、で始まる三文字。非継承者であれば、コト、で終わる三文字。これも、我らの遠い祖^{おや}、小那と琴にあやかる」

黄牙竜全員が、静かにうなずいた。

二十二年間、敵の追撃をかわしながら、生き延びる。普通の人間を装い、暮らしながら。たとえ、果てたとしても、その子らは、きつと守らなければならない。

禅僧の野白が口を開いた。

「では、ひとつ破戒をして、子を儲けるとしよう」と、笑った。
タレジがばやいた。

「俺あ、この年だぜ。どこの女が子供を生んでくれるんだ??」

別れの言葉を残し、全員が出て行った。部屋には、彼と、沙穂、ふたりきりになった。

沙穂がすすり泣いている。

言わなければいけない言葉がある。だが、それはもっと違う状況を思っていた。思い描いていたなかで、最悪の形での、この言葉。

「沙穂、俺に、嫁^かせ……」

沙穂は、小さくうなずいた。

普通の女の子なら、普通に得られる、指輪も、ドレスも、それらを心待ちにして、ブライダル雑誌を眺める日々も、もう、与えてやれない。

思い描いていたなかで、最悪の形。

「すまない……」

泣きながら、沙穂は何度も首をふった。

消え去った兵ら（つわものら）

黄牙竜壊滅より、一年――。

東七姫署、川崎文太刑事は、過ぎ去ったそれらの事件を、執拗に追っていた。

埋立地での大爆発を最後に終息したそれらの事件。

そして、今でも、時々発見される、偽造戸籍の男の他殺体。

負けたんだな。と、感じた。

何かが、挑み、何かに、負けた。

そして、逃げている。

が、今でも終わっちゃいない。発見される死体が、戦いの続いていることを物語っている。

――俺が、暴いてやる。この手で。

黄牙竜壊滅より、三年――。

由季恵ちゃんは、いつの間にか姿を消してしまったあの男の子のことを、今でも時々思い出す。

――どこ行っちゃったのかしら？

しかし、繁華街を遊び歩いている少年には、珍しいことではない。ある日突然、姿を消す。家に帰ったくらいにしか、みんな思わない。彼女もまた、現在は家でおとなしく過ごしている。

先日、お見合いをさせられた。

「お見合いなんて、誰がするか」と、母親に、中指を突き立ててみせた。

しかも、相手は政治秘書とのことだった。

「政治家なんて、くそ喰らえ」と、父親に、中指を突き立ててみせた。

が、相手の古風な名前に少し惹かれた。

会ってみると、その人は、政治家志望のくせに、自分はアナーキストだと言った。

彼女がびっくりすると、慌ててこう説明した。

「無政府国家というのは、よく思われているような無法者国家のことじゃなくて、人類がもっと成熟しないと実現不可能な、理想郷的な世界のことなんです……」

そして、彼女にこう聞いた。

「ジョン・レノンの、イマジンは好きですか？」

彼女がうなずくと、にっこり笑ってこう言った。

「よかった。あの曲にあるような世界を創りたいと思っている人となら、僕は仲良くなれる。自信がある。ちょっとただけけど、ね」と照れた。

率直な感想を言えば、気に入った。こんな人が、政治家になったらおもしろい、と思った。

実は、今日もデートなのである。

彼女が待ち合わせ場所に着くと、その男、芹沢庄之助がすでに待っていて、彼女に気づくと、手をふった。

同、十一月――。

尽きることのない、慟哭。

川崎文太刑事は、息子の誕生から、その瞬間に至るまでの、脳裏に残っていた全ての記憶をよみがえらせ、それを永遠のものとして、胸に刻み、焼き付けた。

息子を誘拐された。

翌日、死体で発見された。

それは、見せしめに間違いなかった。闇に近づきすぎた刑事に対する……。

途切れ途切れに息子の映像が浮かぶ引き裂かれそうな胸のなかで、
瞋恚^{しんい}激しく燃えあがる。

——十年かかって、二十年かかって、きつと仇をとってやる。

——箭内幸甚。必ず、奴の化けの皮を剥いでやる——。

経遠、最後の言葉

黄牙竜壊滅より、四年――。

少年は八歳。幼い頃、改名した。

以前は、竜太郎だった。今は、竜太鋤と名乗っている。

父の名は、久遠耕介だが、それは偽りの名だと知っている。

父は全て、教えてくれた。なにもかもを。そして、厳しい訓練……。

幼い心で、母を殺した相手を憎み、彼はそれによく耐えた。

が、父は言った。

「復讐に心を染めるな。怒りにとらわれた切っ先は鋭いが、逆に手元が狂うこともある。長じて、強き人となり、仲間を捜せ。お前が、仲間と戦いを導け。自分からは仕掛けず、敵の攻撃は全て跳ね除けよ。敵の奸計が何度も牙をむくだろう。が、全て跳ね除ければ、敵は牙を失う」

自分は大きくなったら、刑事になって、仲間を捜そう、少年はそう思っている。

同、冬――。

乃那駕（ノナガ）県、山中――。

三歳になるマコトと、沙穂の手を引いて、経遠は雪のなかを歩いていた。その腕のなかには、みどりこ嬰兒の虎太鋤がいる。

吹雪いている。真っ暗な、山中の道。アスファルトは、凍りついた雪の下に埋まっている。その雪の上に、さらに降り積もる雪。足

を引き抜きながら、進む。

真つ暗な道の端にあるガードレールの向こうからは、溪流のせせらぐ音が聞こえてくる。どれほどの深さか、わからない。

ハレゾたちの移った村の場所を知った。そこへ、向かっている。

沙穂の具合が悪い。

苛烈な逃亡生活。そのなかでの、妊娠、出産。命がけのそれを、二回。

産後の体調が悪く、回復せず、緊急避難的に、そこへ向かった。が、こじらせた風邪が、ここに来て、肺炎になった。

ここから先は、バスもなにもない。沙穂を励ましながら、進む。

このままでは、沙穂はもとより、生後六ヶ月の虎太鋤も死んでしまふ、と感じた。

そして、感じる、追って来る影。もう、何度も切っ先を交えたその相手。今では、その技玉の気配を感じただけで、相手がわかる。

鍛^{かぬち}人。

五度、潜伏先を襲われ、五度逃れた。

——そんなに、真剣勝負がしたいか。——なら、喜べ。今日は、望みを叶えてやる。

彼は、沙穂に、虎太鋤を抱かせ、七拾四番と、八拾九番を持たせた。奴は、技玉を感知できない。持たせても、沙穂が追われることはない。

「これは、将来、虎太鋤が使うものだ。頼んだぞ」

沙穂は熱で朦朧としながらも、その意味を悟り、ぼろぼろと泣いて、首をふった。

「祖^{おやもと}元まで、あと二キロだ。虎太鋤と、マコトを、ハレゾのところに届けてくれ。双蛇牙の隠し場所も、伝えてくれ。これが、最後の働きと思つて、」

この期に及んで、俺は何を言っている、と思つた。

——他に、言うべき言葉は……。

「今日までのこと。礼を言う。全て、沙穂のおかげだった」

違う、と思い言葉を継いだ。

「きつと、あとを追う。その肩を、支えてやる」

まだ違う、と感じた。

「子供の頃から、ずっと、沙穂が好きだった。沙穂を幸せにしてやりたかった。沙穂と普通に暮らし、沙穂と幸せになりたかった」

何を口にしても、この思いを言葉にすることはできないと気づいた。泣いている沙穂を残し、彼はその場を離れた。

——この身をおとりに、沙穂と子を逃がす。

経遠、鍛人、最後の勝負

小祇健迅は、吹雪の中を、追っていた。
経遠を。

——あの野郎、こんな天気の日くらい、宿屋でのんびりしたらどうなんだ。追っかける身にもなってみろ、ってんだ。

が、奴は女房子供を連れている。きつと、追いつけるはずだ、と思ひ、足を急がせた。

この四年、何度襲つても、逃げられた。都合、五回。

——が、今日こそ、決着をつけてやる。

いつしか、風がやんでいた。ただ、無数の大粒の雪が、まるで止まっているかのように、空中に浮いている。

その向こうの闇のなかから、静かに現われた人影。

経遠。

健迅は晒った。

「覚悟はいいか?? 経遠。今日こそ、貴様の最後だ」

経遠は静かに答えた。

「喜べ。今日は最後まで相手をしてやる……」その両手に、ナイフを握っている。

健迅は、鞆から古式鉈を取り出した。

感慨深いものがあつた。

「思えば、名勝負だったな」

経遠は、静かな笑みを浮かべた。

「貴様は、強かった。俺が知るなかで、一番だ」

「貴様も、だ」経遠が答えた。

「今日こそ、決着をつけよう」

「異存はない」

「行くぜっ。覚悟しろっ」

降りしきる雪の中に身を躍らせて、鉈をふるった。その太刀筋を

さらりとかわし、経遠がナイフを躍らせた。続けざまに何度も。かわした。そして、渡り合った。

あいかわらず、ぎょつ、とさせられる速さだぜ。かわせる俺も、俺だが。ほんとに、殺すには惜しい男だ、と刃を交えながら思った。「スポーツマンって、良いもんだな」

彼が言くと、経遠はナイフをふるいながら、ふつ、と晒った。

「分かり合える気がするぜ」

「どうかな」と経遠はまた晒った。

闇のなかで、ちらちらと光る三枚の刃。降りしきる雪を切り裂き、躍る。好敵手に、渾身の一撃を叩きこもうと。

そして、終に、健迅の鉈が、経遠の胸板を砕いた。

バランスを失い、後ろ向きに倒れた経遠。ガードレールの向こうの闇のなかに消えていった。

「やったぞ。経遠を倒したっ」

今の手ごたえは、間違いない。殺っている。健迅は喜び勇んで、ガードレールの下を覗き込んだ。真っ暗でなにも見えない。溪流のせせらぎだけ、聞こえる。

その時、はっ、と彼は気づいた。

――奴はなぜ技玉を使わなかった……？ 使えば死ぬことはなかったじゃないか、いつもそうしてたじゃないか……？

――いや、それよりも、女房子供はどうした！？ どこにいる！？――まさか……？

――まさか、女房子供逃がすため、丸腰で挑んできやがったのか！？ はじめから死ぬつもりだったのか……？

彼は、鉈を叩きつけ、地団太ふんで悔しがった。下に向かって叫んだ。

「ばかやろうお！！ 経遠っ！！ 戻ってこい。死ぬなっ。もう一度勝負しろっ」

一人叫んだが、闇の奥は静まり返っている。

健迅は、あきらめ、静かにそこを立ち去った。女房子供の殺害も命令されている。が、経遠を殺れば、文句はねえだろう、と思った。

来た道を引き返した。

経遠、沙穂、天（なかなは）となる

真っ暗な、川のそばに、彼は倒れていた。

腰から下が、凍りつくような流れのなかに浸っている。

胸に負った傷から、とくとくと、温かい血が、流れ出ている。けれども、もう、その体から感覚は失われていた。

——沙穂。がんばれ。すぐに、傍^{そば}に行つて、その肩を支えてやる。

仰向けに倒れて、真っ暗な空を見ていた。空の向こうから、無数の雪の粒が現われて、舞い降りていた。

気がつくと、小さな三人の子供が、彼の顔をのぞきこんでいた。

「お前たちは、誰だ……？」

驚いて問うと、一人がにこつと微笑んで答えた。

「知らないわ。だって、まだ生まれてないんだもの」

死ぬ間際の直感で、理解した。

——そうか……。この子たちが、剣に宿る精霊……。

「頼みがある……」彼は言った。

「虎太釦と、マコトを頼む。君たちの、力を貸してやってくれ……」

三人の子供はにっこり笑って口々に言った。

「任せて。憶えてないかもだけど」

「まあ、憶えてなかったって、なんにも心配要らないわ」そう言つて、肩をすくめてみせた。

彼のくちびるにも、笑みが浮かんだ。

目を閉じた。

——沙穂……。すぐに行く。その肩を支えてやる……。

いつしか、子供たちの姿は消えていた。

そして、もはやなんのぬくもりも持たなくなった頬のうえに、静かに雪が舞い降りていた。

闇の底が、仄かに白い。

沙穂は、そつと肩に触れるものを感じ、経遠が、もはやこの世にないことを知った。

——沙穂もすぐに参ります……。この子たちを届けたら……。

急がなければ、死んでしまいかもしれない、と感じた。腕の中の虎太鈴は、まだ生後六ヵ月。なにも言わず歩くマコトも、まだ三歳。この雪のなかでは、凍え死んでしまふ、と感じた。

叶わぬ体に鞭打って、先を急いだ。意識が朦朧としていた。なにもかも、朧げだった。

風がやんだ。大粒の雪は、まるで空中に止まっているかのよう。降り積もるその底が、仄白い。

降りしきる雪の向こうから、みつつの人影が現われた。

幻怪、かと、思った。

龍りゅうのつからの族、古老三名だった。

「この子を……」

腕の子を渡すと、沙穂は力尽き、身を落とした。

座するハレゾの前で、マコトが母を捜し歩いている。母を呼び、家中を覗いてまわっている。

沙穂は、双蛇牙の隠し場所を告げると、そのまま意識を失い、もはや目覚めることはなかった。なきがらは、その夜のうちに埋葬した。マコトが目を覚ます前に。

今は、母の名を呼ぶが、まだ三歳。いずれ忘れる。

この子の記憶のなから、母の名を消し去らねばならない。母がいたことさえ。

名を知れば、求め、長じればいずれ捜し始める。それは、危険に近づくことを意味する。ゆえに、この子に、母の名も、母がいたこ

とさえ、教えてはならない。無論、虎太釦にも。

マコトは母が見つからず、べそをかきはじめた。

ハレゾは、庭を見やった。

未明からの雪はやみ、薄い水色の空が広がっている。

龍は墜ちた。だが、いずれまた空へ舞い昇る日が来る。

あと、十九年――。

カヤ、夭（なかなは）となる

黄牙竜壊滅より、六年――。

苛烈を極める逃亡生活。そのなかでの、妊娠、出産。カヤの命の
ともしびは、燃えつきようとしていた。

圭人は一年前に死んだ。

敵の襲撃から、彼女を逃がそうとして、あっけなく死んだ。あい
かわらず間抜けで、逃亡生活だというのに、緊張感の欠片もない奴
だったけれど、あっけなく死んでしまった。

カヤは、今では、圭人のいた生活を懐かしく思う。

焼き物の里を転々とし、圭人が働き、割りあい楽しく過ごせたの
ではないか、と思う。

が、彼が死んでからの生活は苛烈を極めた。

お腹に、すでに子がいた。

世間から身を潜めての、生活。

お腹の子を気づかいないながらも、日々の食べるものにも困る、暮ら
し向き。

普通であつても、命がけとなる妊娠、出産。誰にも頼れない、ひ
とりきりで、それ。

ようやく、新しい命をその腕に抱いたが、彼女自身の命は失われ
ようとしていた。

その命を腕に抱き、街をさまよい歩いた。深夜零時。

探して、そして見つけた。

一軒の、孤児院。

その門の前に、籠を置き、腕の中の子をおろした。

「ごめんね。ママは、お前になにもしてあげられない。ひとつだけ、
お前にあげれるものは、名前。お前の名は、カムヤ。わたしの名を、
あげる」

名前の暗号を与えなかった。

生んだときに、気づいた。いや、思い知らされた。

許されることは、思わない。けれど、仲間を、兄を、裏切る。

たとえ、裏切っても、この赤ちゃんを、巻き込みたくない。できるなら、普通に、幸せに暮らして欲しい。

空を仰ぎ、心のなかで、兄に詫び、そして、ポケットの八拾五番を取り出した。

「これが、ひよつとしたら、坊やの身を守ってくれるかもしれない……。大切に……母だと、思ってた」

その時、玄関に姿を現し、こちらを見ているシスターに気づいた。彼女は、立ち上がり、必死に訴えた。

「おねがいです。許してください。わたしには、育てることができません。どうか、ここで、育ててやってください」

シスターは黙って聞いていた。彼女の様子と、顔を見ただけで、ある程度は、察することができたのかもしれない。

彼女は籠を抱き、シスターに渡した。

「カムヤと言います。これを。この玉を、母が残したものと、教えてあげてください」

シスターが、受け取った。

彼女は泣きながら、何度も頭をさげ、そして、ふり返らずに駆け去った。

あとは、どこでのたれ死のうと、かまわない、と思った。が、一分も経たないうちに、人影に行く手をふさがれた。敵。三人。

「搜したぜ。カヤだな？」にやにや晒いながら、言った。

——こいつらは、赤ちゃんには気づいていない。けれど、ここは孤児院から、いくらも離れていない。

彼女は、覚悟を決めた。

「そうとも。わたしが黄牙カヤである。この首とって、名をあげてみよ」

そう吐きすてると、わき道へ逃げ込んだ。男たちが、追ってきた。少しでも、孤児院から離れた場所へ、それを思つて駆けた。

ふたつ角を曲がった。

追いつけないと思つた男が、彼女の背中めがけて、ナイフを投げた。彼女は、自分の体に、入り込んだ、冷たい鉄の切っ先を感じた。焼付くように熱かった。

足がもつれ、転んだ。が、立ち上がり、素早く脇道へ逃れ、塀を乗り越え、民家の庭先に倒れこんだ。

男たちの足音が、塀の向こうを駆けて行つた。

ふつ、と、彼女は笑つた。

——メッタ刺しにされる最後は、なんとか、避けることができた。が、背中に刺さつたそれは、致命傷となつてゐる。それは、もう、わかつた。あと、数分、いや、数十秒の命。

——なにを思おう……。うつぶせに、倒れたまま、思つた。

赤ちゃんのこと。

——赤ちゃんのことを思いながら死んでゆけるとは、幸せなことである……。

そして、浮かんだ主人の面影。

——なんだか、よくわからない奴だったが、あの間が抜けた顔を、もう一度見てみたいものだ……。

そして、目の前にいることに、気がついた。しゃがみこみ、彼女の顔を心配げに見ていた。彼女が驚き目をみはると、主人は、にこつと笑い、うれしそうに言つた。

「やあ。やつと、カヤが気づいて、くれました」

そして、以前と変わらない、少し間の抜けた顔で微笑みながら、言つた。

「でも、謝らなければ、なりません。非力なわたしでも、精霊になれば、きっと不思議な力を得て、いとしいカヤを守れると、思つていたのですが、まったく、なんの役にも——」

その姿がにじみ、苦しみに歪んでいたくちびるから笑みがこぼれ

た。

もう良い、黙れ。この、おしゃべりめ……。

武遠、九拾九番奉納

黄牙竜壊滅より、十年――。

武遠は、四歳の娘コナイと共に、玖州（キュウシュウ）にいた。その逃亡生活のなかで、彼は、あの九拾九番を見つけ出していた。昨日、それを、霊山の祠に納めてきた。

おびと（首）ハレゾらが、移り住んだ廃村の場所もつきとめていた。

が、そこを訪れるつもりはなかった。逆に、自身の技玉みつを、送り返した。もう、使えなくなっていた。脈動、起らない。

すでに、妻コハルを失って二年になる。

せめてもの救いは、それが、病であったこと。が、苛烈な逃亡生活が、その命を奪ったことは明白だった。

彼女との間に儲けた一人娘、コナイと名づけたその子に、彼は、まったくくなくにも教えなかった。

――この子は、戦わせない。

――普通の娘として育てる。できるならば、一生、を。仲間を裏切ることになる。

が、コハルとの間にできた、大切なこの子を、戦わせることはできない、と思った。コハルを失い、そのことを思い知った。

把式が、執拗に追ってきている。その影が近づくたびに、職を変え、住まいを変えている。

――守り抜かなければ、ならない。この子を、失うわけにはいかない。この子を、守りながら、普通の人間を装い、暮らす。

――そして、必ず生き延び、時が来れば、俺が戦う。必ず、俺が戦うから、この子を巻き込むことだけは許して欲しい。

遠い空の下で暮らす仲間に、心のなかで詫びる。

けれども、不安なこともある。そのことには、彼も、もう気づい

ている。

コナイは、遠く離れた場所にある、技玉の気配を、感じることができるのだ。

あと、十二年。

黄牙竜壊滅より、十二年――。

七姫市、某所に、小さな自動車修理工場がひっそりとオープンした。オープンしたばかりだというのに、古びくたびれたガレージに、小さく掲げられた看板は、

『ミケ・モーターズ』。

その夕暮れ、店舗前で、三毛門は息子麻太路の肩に手を乗せ、空を見あげて語った。

「我らには、主君がある。そのことを、幸せなことと思いなさい。大人になったら、ここに構えた店で、仲間が現われるのを待ちなさい。その日が来るまで、あと、十年である。それから、学校で、普通の話し言葉を習いなさい――」

竜太鈿、十八歳／北都京へ発つ

黄牙竜壊滅より、十四年――。

竜太鈿は、十八歳になっていた。

すでに数度、父と共に敵と戦っていた。そして、敵の強いことを知った。その、巨大なことも。

警察学校への入学が決まったその日、父は帰ってこなかった。翌日も、その翌日も、父は帰ってこなかった。それで悟った。すでに、父のこの世にいないことを。

悲しむことはせず、心のなかで礼を言った。

父の残した技玉を手にとった。そして、妖刀と、鎖帷子。

敵は、父を殺したが、この住まいまでは知っていないはず。と、考えた。もし、知っていれば、すでに襲撃されているだろうから。が、用心するに越したことはない。

彼は、準備をして、七姫市へ向かった。そこで暮らしていれば、仲間に会えるような気がした。

黄牙竜壊滅より、二十年――。七姫市――。

彼は、悩んでいた。

わたしの人生がこれほどまでに空虚なのは、なぜであろうか。そして、気づく。

ノストラダムスである。一九九九年以降の人生設計を、まったく描いていなかったのである。ああ。わたしはこの先々に

して生きれば良いのであろうか。

とはいえ、そのデスクの上には、今日からプレートが乗っている。

『編集長 田所オサム』

彼は、まったく無目的に、部下を呼び集め、こう激を飛ばした。

「我が七姫スポーツはあ、ゴシップ紙である」。諸君らに、特命を与える。是が非でも、宇宙人を見つけるのだ。これは、至上命令である。」

もともと勇壮、な口調に、尊大、も加わっていた。

古参記者が眉をひそめ、全員の目が点になった。が、自身の身をまったく省みない彼は続けた。

「おい。そのお、なんと云ったか、先日、本社から来た問題記者、お前だ。そのお、……本多??」

「本多イサナです」

「そう。イサナ。キサマは特に、頑張れ。キサマなら、必ず、見つけることができる。それから、お前。入社したばかりの新人の女」

「わたしですか?? わたしの名前は」

「名前など、どうでも良いのである」。お前は今日からハイエナと名づける。」

あと、二年。

虎太鋤、十八歳／北都京へ発つ

黄牙竜壊滅より、二十二年――。

経遠、沙穂、なかなは天より、十九年――。

「やい、クソじじい。俺はもうまっぴらだ。こんな田舎出て行つてやる。いいか！！見て驚くな。これは、七姫市立大学の合格通知だ。てめえに内緒で受験しといたんだ。どうだ！？驚いたか！？俺はもう、こんな田舎も、何のためかわからない修行も、うんざりなんだ！！俺は北都京へ行く。七姫市ならマコトも住んでいる。どうだ。文句があるなら言ってみやがれ」

座するハレゾに、虎太鋤君は言った。

凜々しく成長した孫の顔を見あげ、内心頼もしく思いながら、瞑目し答えた。

「好きにするが良い……」

「な、なんだ！？いいのか？言ってみるもんだな……。じゃあ、俺は荷造りをしてさっそく出て行く」

「ただし。双蛇牙と技玉ふたつを持っていけ」

「ああ。あの日本刀と変な玉か。そんなもんでいいなら、持っていく。荷物の邪魔だが」

あと、二ヶ月。

いそいそと、荷物をまとめ始めた孫の背中を見て思う。

――経遠よ。龍のふたたび昇るときである。貴様の子は、どんな龍になるのじゃろうの……。

付録

九拾番	天女 / フツ
八拾九番	妖狐 / 経遠
八拾八番	幼蝉 / 鍛人
八拾七番	針鼠 / 武遠
八拾六番	風竜 / フツ
八拾五番	鉄塊 / カヤ
八拾四番	大水球 / 武遠
八拾参番	怪猫 / 八ナ
八拾貳番	稻妻塊 / 武遠
八拾壹番	焰龍 / 種遠
八拾番	天狼 / 鍛人
七拾九番	蛇女 / 種遠
七拾八番	鎧武者 / 把式
七拾七番	幻影の獅子
七拾六番	鴉人
七拾五番	化鳥 ^{けてう}
七拾四番	水坊主 / 経遠
七拾参番	毒蜘蛛 / 野槌
七拾貳番	雷獸融
七拾壹番	焰竜巻 / 銅俱
七拾番	天ノ童部 / 陽菟衣
六拾九番	蛟（小竜）式

六拾八番 泥蛭 / 邪耶

六拾五番 鎖蛇 / 鎖蛇畏

六拾四番 蛟（小竜） 壺

六拾参番 牛蜘蛛

六拾貳番 雷獸蛇

六拾壹番 焰獅子

六拾番 希火

五拾九番 大目玉

五拾参番 一本足貝 / 巴耶毘

九拾八番 メリヒム / 封印済

九拾七番 バンパイア / 召喚師

九拾六番 ラフ / 封印済

九拾五番 名・不明（シャクス） / 召喚師

九拾四番 ウアラク / 召喚師

九拾参番 ハルパス / 封印済

九拾貳番 サクルフ / 封印済

九拾壹番 グラシャ / 召喚師

九拾九番 イヤハテの魔物 / 持ち人なし

—— D r a g h i g n a z z o

虎太鉦、十八歳／北都京へ発つ（後書き）

最後までお付き合いいただきまして、ありがとうございます。

外伝を紹介させていただきます。

「ハナと、種（ドラギニヤッツォ）」

「経遠と、沙穂（ドラギニヤッツォ）」

「カヤと、圭人（ドラギニヤッツォ）」

よろしくお願いします。

ご感想などいただけたら、励みになります。
よろしくお願いします。

— D r a g g i n g n a z z o —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0455g/>

ドラギニヤッツォ

2010年10月8日14時09分発行